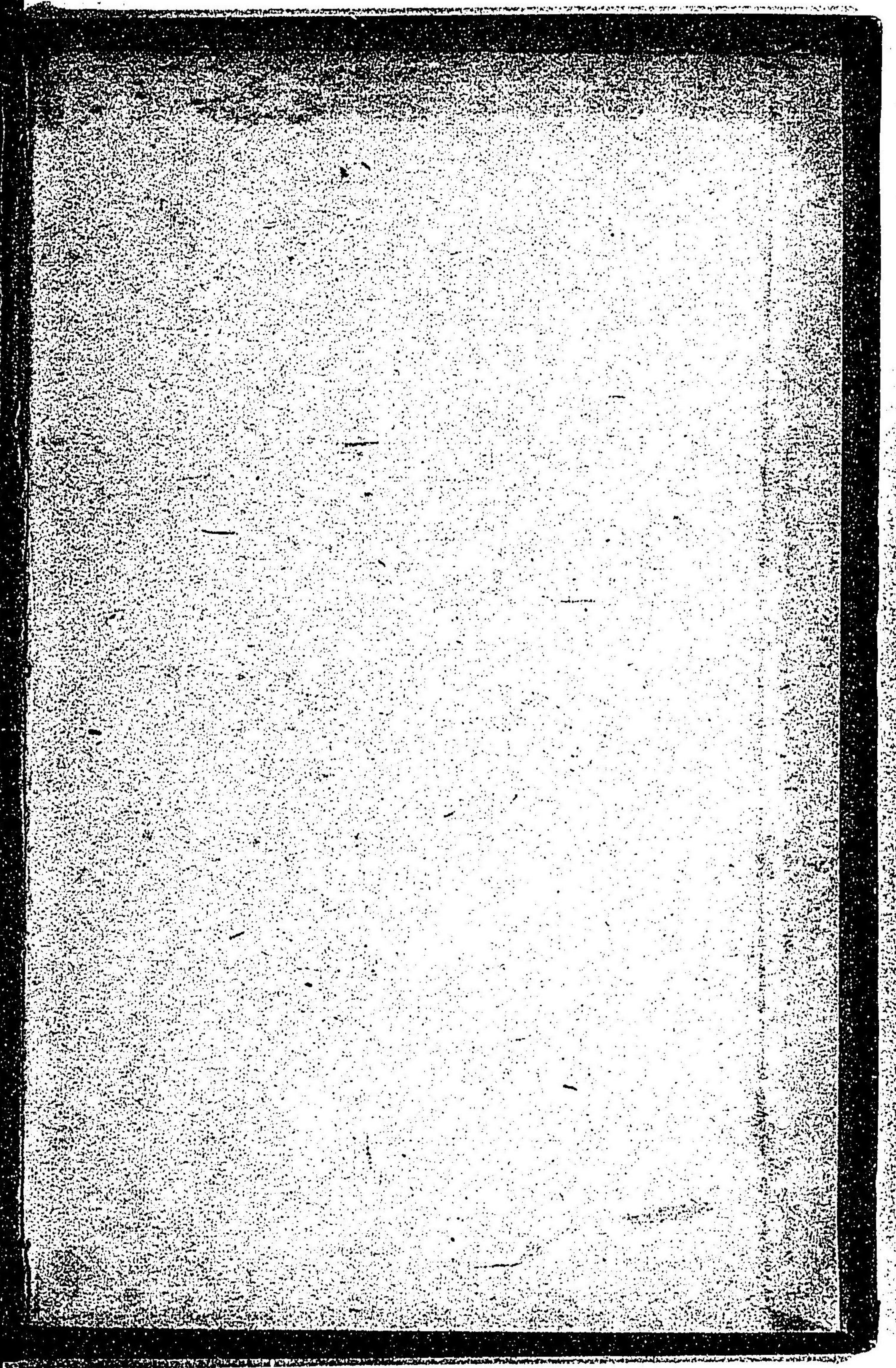
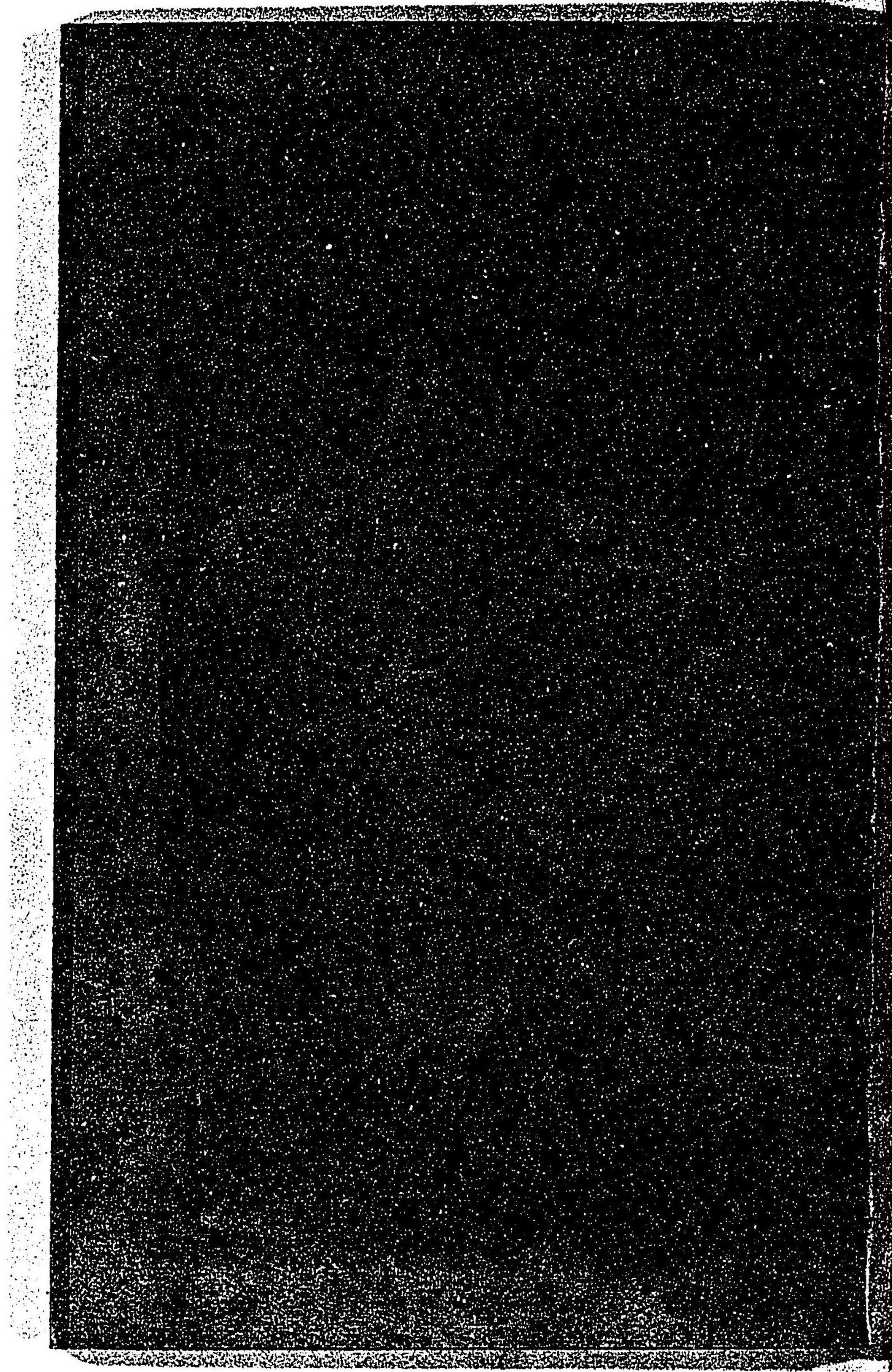


和井英傑傳

163
96

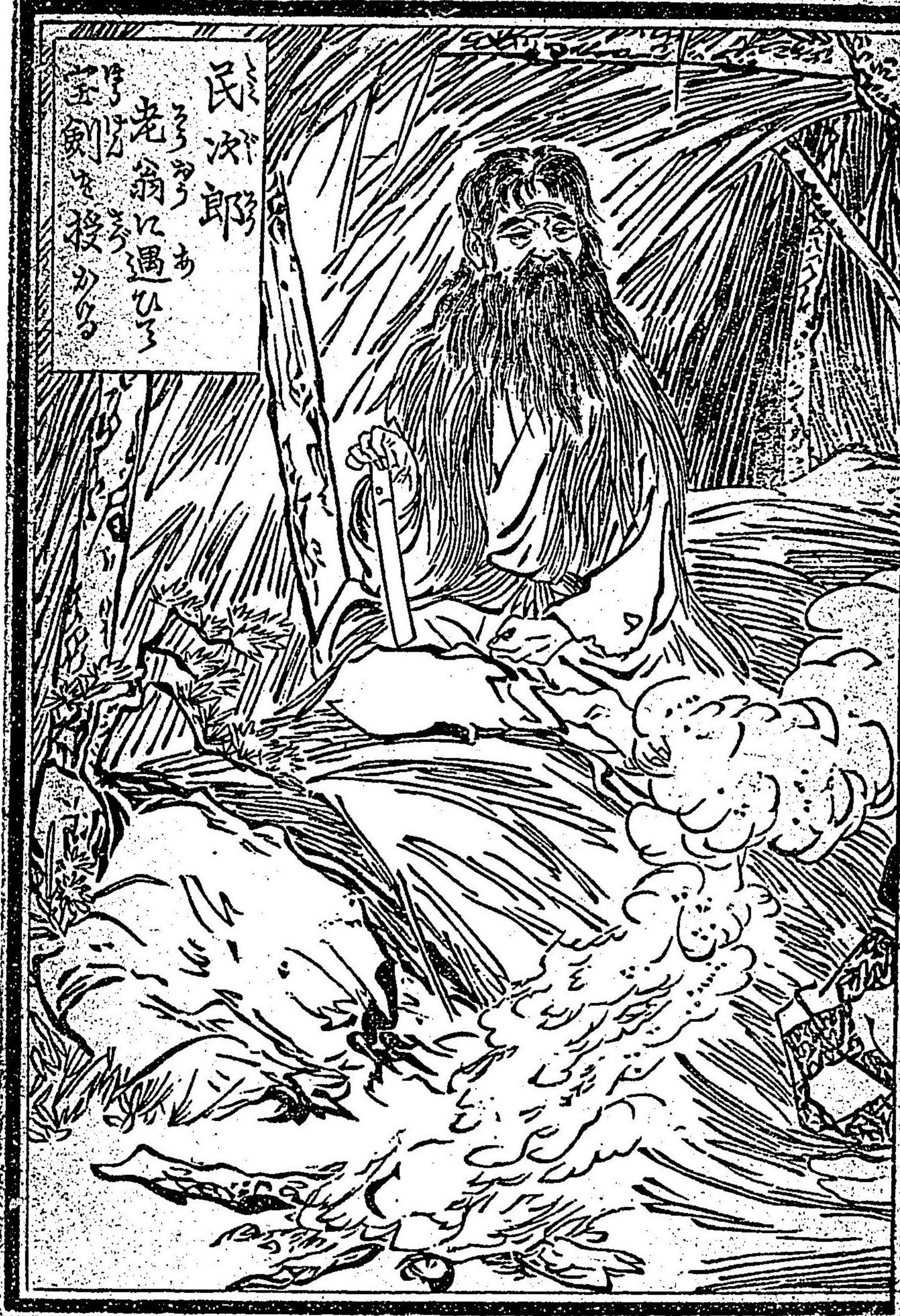




松井英傑傳序

柳下癡れて大禮服行はれ結髪滅して散髪起る世の變遷に隨ひ
 て勃一到定めなし復讐の事野蠻乃弊風として法律は之を嚴禁
 と雖も復讐時代の溯りて復讐者其人の心緒を觀察すれば可憐
 可憫堪ゆべからざる者多し父君の仇は供に天を戴かず百年の怨
 を飲んで惡漢無頼の白刃よ伏し葉末の露と消へし身の子となり
 臣となれる者思ふに此に至りおは誰か怨敵の生首提げて紅涙阿
 伽の水に替へ憤墓を祭らざるを得ん故に古來孝子の心裏を稱揚
 して或は書冊に或は俗歌に傳へて以て名聲を渡世に博す此種や
 多く其事普ねし本書ハ有名ある松井兩雄が苦辛焦慮と遂に仇を





大坂長町一報する顛末を書き悉くしたる冊子なり其擧の野蠻たるか果た開化なるかは之を知らざと雖も孝子の心情掬すべき事多し萬更ら捨てたる者にもあらず請ふ消閑の友とせよ書肆に代りて提燈を持つものなり

夢の家まほろし

松井英傑傳



風靡既に異兆あり
奇禍却て後榮を啓

凡そ一世に轟く英傑の出るや其始必す奇異の事に因る多し人文開明の今日より見れば實に一笑に附し去べきが如くある其物理意味の往昔に因つてハ尋常規律に適合せざるの奇事あり或は天地の靈應あるハ智の豫測をべからざる怪物有とや是を西哲の所謂理外の理ある者存する故か茲に亦徳川幕政の時めきし正保元年の頃とて出羽國まで十八萬石を領する山形城主松平下總守忠廣殿の家臣多兒其中に才智發明の聞へ高き松井内藏となん稱する人あり身の丈五尺九寸容貌毅然として文武の道は更あり敷島の道に通じ亂舞茶湯等の遊藝をとも人に勝れしかハ君の思召小協のみならず一家中尊敬せざる者なし其が子に市兵衛民次郎要人とて三人の男子あり長子市兵衛兼利は骨柄父に勝り丈六尺餘有て劍術ハ小野典膳が流を汲み當時無雙の聞あり子は星野勘左衛門と師を俱にして其業伯仲さ餘餘ハ寶藏院の門に在て一二を争ふ其他馬術水練に至る迄與藝を極むるものとならず性質風流にして管絃

二

の道をも心得たりしかば家中若輩の餽饗なりとて譽め賞へざる者なりけり三男要人も頭
 敏ふして手跡美しく武藝を好み又自然と亂舞ふ心を寄せ容顏殊に麗しければ十歳の時より
 與平美作守殿へ小性奉公に出たり次男民次郎は兄弟に似もやらす無藝無風流にて何一
 ツ得たる者なく見たまけり去乍ら愛小尤も不思議とするは未御主君下総守播州姫路御在
 城の御民次郎漸二歳の時なりしが乳母に抱れて邸の門前に遊び居たりし處然も怪なる乞食
 体の者通掛りふと民次郎見て立止り熟と其面を打視り此子誠凡人にあらず成人せば我子
 にせんと言ける小より乳母始め傍に居合たる若黨共大に怒り汝非人の身として御主人の御
 子息を子にせんなどよの不屈至極な奴ありいで打のめして呉れんと辨れば彼非人阿々と打
 笑ひ假令七重の櫃ふ隠し置共時節至るに連行て我子小せんと罵て賍行こと駿馬の如く遂に
 其影を見失ぬ是後後の禍の基とハ神ならぬ身の皆々が能々氣の遠たる非人かなと打笑ひ
 て更に心に留めざりけり却説山形と羽州第一の大都にして山水清秀まゝ婦女の容色艶麗
 土地肥饒五穀能熟し産物最も多く又四境は皆陸を控へて其險峻成事所謂一夫關に當れて萬
 夫進む能はざる天府の國と云べし此近邊の小所古跡多き中にも城下を離る一里半にして

三

千年山と呼るは其麓に彼萬葉集にも詠たりし阿古屋の松の古跡ありて傍なる萬松寺の
 境内に實方中將の石碑苔むして殘れり然小松井内藏の元來歌道の心懸深き人なりしかハ斯
 る名所古跡の遠邇ふあらむ詮方おれを程遠かたぬ郊外に在乍らとて仇小過すべきやと或
 年彌生の中句空も長閑に風暖なる日妻女小供下女下男を引連て千年山へ行けば樹々の
 新緑錦霞の如く爛熳たる百花恰も燃るかと思はれ自ら氣も清爽となり三冬の鬱結一時に散
 ずるの好景なれば價千金の一刻と何も笑語樂て先實方中將の石碑を拜し古の事なき思ひ
 出つ不意泪に呉れたり又阿古屋の松も今は早名のみ残て二三本の小松だも名殘惜に生へ並
 びし何となく昔床しく思はれて毛氈敷皮なごを敷運ね酒壺割籠取出して宴を始め今日と
 主従の隔なく打寛ぎ何も皆圓樂して各絲竹鼓金の秘曲を盡けるに其音調の妙なる事實空行
 雲も止るかと思はれ道行人も足を止て聞わたり斯る中にも民次郎は例の無藝なる惡戯者お
 れば其音曲を聞んどもせず出放て遊び居たるに何所共なく先年播州姫路にて見し乞食突と
 斯來り民次郎を腋ふかひ込此兒に激べき事あれば五年の間借請て行たりと呼りつゝ、賍
 出を聲に驚き一同慌て騒て追駆けたれ其曲者足の早き事飛鳥の如く見るまに行衛を失ひし

口
うば父内蔵の切齒を舐して怒り早速親類へ人を馳せ知せ手分ちして山々谷々まで隈なく捜し求められ近村の百姓は是を聞傳へ兼て人望有老臣内蔵の事成に忽數十人馳せ集り三四里の間捜し尋ねまか其更ふ影だに見當らざれと今將方泣ばかり尋ぬる縁のつゝもたれ世に
一な死者と諦めて失なひぬる日を忌日と定免回向佛事なせ營むの他なきと思はざりける願あり
り死扱を松井民次郎の怪なる非人に誘われ夢とも現ともなく深き山奥に入り人里を離る、
事最早數十里ならんと思ふ頃彼非人民次郎に向ひ如何に小人父母に離れ斯く山奥に伴ひ来
られ聊かし怖しく思ふらんと問われ民次郎此時僅十一歳成りが少しも恐るゝ氣色なく嚴重
に正容ひして言けるやう汝のよも誠の非人にて有まじ天狗杯と云ふ者あらん我を強て運
れ来りしは喰はんどの心なるか幼少され其武士の悍松井民次郎なるぞなきて阿容々々妖怪
の腹を飽す可きと腰の短刀に手を掛し容状は尋常の童子の儔と見へざりけり非人之を見
て潸然と涙を流し儲々我眼力誤らず天晴無雙の英傑か必ず怪む勿れ我狐狸妖怪の類に非
ずして誠の人間なり斯無体の舉動してければさな思ふも理あり委細は家に往て語さんい
ひるべしと云われ生得凡ならざる民次郎故入らめと思ひ快げ小納得したりければ彼

非人再び民次郎を抱き上げ五六町も山奥に進み行けるに最も見ことなる門構の家居あり結
締の総て上古の風なり民次郎も幼な心不審しく思ひ煩ふ体を見て彼非人云ける様様や我
が家ありとて突と門内に入れを家族共立開途出迎へ夫より衣服を更えたる容子を視れば
烏帽子を冠り狩衣を着し古雅幽閑其容儀嚴然として威風凛々たるを拂ひたり民次郎は更ふ合
點ゆかず只茫然として黙座し居たり聽て彼老人居並たる家族共に向ひ此少年の兼て我子に
せんと見立置し者にて今日伴ひ来としなり以後汝等此小年を敬ふ事我を敬ふ如くせよと云
はれべ一同ハット平伏して御養子の入らせられて誠は目出度存し奉ると祝きて退きぬ民次
郎益不審晴れやらす夢では無か去との長兄夢かなと竊ふ股をつめつて見れば痛ありさては
夢いあらざるかと心の中にとつていつ頻りに煩ひ居る体を見て取る老翁さありあつんと
領丁て民次郎に向ひ斯譯も次第も告ずして無体に伴ひ来りし故態々不審きことに思らん我
は桓武天皇の後胤平茂直と云者なり我先祖平の維茂卿武勇絶倫なりしかば平將軍貞盛卿
の養子となり玉ひ世に餘吾將軍と稱せられ玉ふ其節妾腹に出生せし幼名民丸加冠して兼滋
とぞ稱せらる其後餘吾の君越後守に任せられ彼國にて卒し玉ぬ滋兼君は此國に居て代々武

六

名を落さむ最重く待遇れ玉ひと其後々三年の役藤原清衡功ありしを以て陸奥出羽の押領使とあし鎮守府將軍の如く爲置れる故清衡が威勢日々に盛んとありぬ其時宛も滋兼君の孫維滋の代なりけるが渠等の手下が屬せん事を心苦しく思ひ此地に退そき隱遁まで今我が代まで小子孫繁殖し血統連綿別に一世界をなして王化の及ざる所なり然るに我年既小老ぬれ共男子なきに因て氏族の内ふて擇り豪傑を代々武を表とし文を心として氏族の主たりまに今更庸人を養ふて子とすべし非ず去迎他姓の子を養ふは我家法の大禁あれ何卒餘吾の君の血胤よまて豪傑の氣象ある男子もあらばやと數年來姿をやつし所々方々を尋しにす余年前播州姫路の城内にて汝を見こへ願ふ所の小兒なりと思ひ其姓氏を尋ねしに松井氏の子ありと云ふ松井と平氏にまて餘吾の君の後胤なる事明なれば是ぞ先祖傳來の秘術を授る器を得たりと悦び時を待しに今日幸ひ時至て伴ひ來しあり而其術を教へべき日數凡る五ヶ年程にて成就すべし傳へ終らば元の父母に返さん因て去迄は某を父とも思ひ玉へと云へむ生得凡庸ならざる民次郎悟る所ありてふや 忽容を改め彼の老翁の前小平伏し未だ骨肉も固らざる乳嗅き不束者をさばと迄御望懸下され刺さへ祖先傳來の大切なる秘術を御傳

七

へ下されんとは生々世々の御高恩冥加身に餘る仕合あり向後父とも師とも尊と仕へ申すべし何卒此上の子とも弟子とも思召て不惑を懸させられなば有難く存じ奉ると年ふも似氣なく爽かに陳ければ老翁大いに悦び我大願成就せりさて夫より祝ひの酒宴ありしが更閑て皆々腰に就きぬ老翁は民次郎を伴ひ寢所へぞ入ふける去々老翁悦びの餘にや寐もやらす床にありて侍民次郎の様子を見に始て來る所なれ共少しも頓着せず高擧して寝入りければ愈末頼母しくぞ思ひける初翌日の朝老翁疾く起出ぬれば民次郎も續て起出老翁夫婦の機嫌を伺ひぬるゝ老翁は近く招れ今日より汝に劍術を教へんと思なり如何習はんやと問ければ民次郎躍り上て悦び夫よと某像ての願なりわはれ教へ玉へるべしと勇立有様を見て老翁も殊の外悦び替古場へ誘ひ行死侍士共を相手として劍術を習はせけるに其體勿々尋常ならず一を教れば十を知るの才智あり老翁益々悦び夫より弓馬柔鎗の諸藝を學ばせ夜は學問筆道を教ゆるふ晝夜怠らず一心不乱に研磨しする其效空からず僅二ヶ年の間に文武兩道熟達しけるにぞ或時老翁民次郎を膝近く呼寄せ汝兩年の間諸藝熟達なし我見込に違はざるは歡ひ之ふ過す去々今迄學び得たるは只世間に有ふれの術にして珍しからず我殊更小教

を見立て傳へんとする術の家相傳の秘術にて唐土隨の世の末小虬髯が李衛公に相傳する所の兵法並に劍術なり今六合の中に之を知る者我一人なり因て本朝へ傳へんと思へども其器非ざる者へ想に傳ふべからず汝幼少あれ共誠に其器に當を以て今より此書の意味を明め極むべし汝聰明あるも未解難き所あらん若ざる事あらば夜を日ふ繼て考へ思ふべし思ふて止すべし必ず神道妙會するに至らん汝の其道の妙所を得るの性質あり此書の深妙の師以て弟子に傳ふべからず親以て子に傳ふる事能はる唯年月の久きを積み漸々に妙を得て遂に釋然として秘奥に達するに至れば妙の又妙を得て言ふべからざる所あり必ず效の速に擧ぐん事を望む勿れと最叮嚀に戒えて三卷の書を授ければ民次郎押越き不束ある小生海山の高恩深恵を蒙り夫のみならず御家相傳の秘書を御傳へ下さる、事死して猶忘却仕らず唯此上へ心死に思ひを盡しし尊慮に背き奉らずとて夫より一室小引籠寢食を忘れて晝夜眼を彼秘書を隠すこと三百餘日なりしが精神の一到何とて成らざる事のあるべしや遂に其書の奥妙を得たりと思ひえれば老翁の前に出て平伏あし云けるは某最早此書の意を悉く學び得たりと傳ゆるなりとて事も喜びに言けるを老翁聞て如何にも汝の才智なればさもあらん然

らば先劍術の妙所を試みんと云ければ民次郎答て仰せ畏りしへ共此書か法は正を以て邪を折き直を以て曲を受く今邪もあし曲もなし何を相手と仕りて試ぎんやと云ければ老翁びにもと點頭是より東南に當り山賊の張本に蛭沼鬼彌太と云ふ者あり強力にまて其心飽迄殘忍なり尤も我郷へ何の仇も爲ざるは此所あるを知らず又道も凡俗の來る處にあらざれむなり然れ共樂夥多の手下ありて奥羽の間に出没なし押込切取を唯恣にして諸民の難儀となる事甚し我疾くより誅せんとは思ひしも汝が此書の意味を明め悟りなむ此事を以て試んため今日迄打捨置ぬ汝今此書か劍術の深意を悟り得たりとならむ今夜渠が山塞に行て蛭沼が首を取り來らんやと云ければ民次郎莞爾として蛭沼とやらん的首取來んと霧中の物を取より易ありなんと事もなげふ申しげし老翁然らば蛭沼の山塞へ到るふハ眠々たる壘谷を越へて行ふよ里數三十里に及ぶなりとて道の圖并に蛭沼が家居の繪圖面を取出し斯の如きこと故日數如何程か、るべきや又人數幾何召運れべきやと問は民次郎笑て師父君何とて戯れ給ふや彼術を以て走らば一時に彼所に到るべし多の人を頼むに及ぶべからず某一人にて事足りと云けるにぞ老翁手を拍て大に悦び汝既ち劍術の妙處を得たり我甚安堵せむと言ながら目

立て資藏小入金禰の袋小入たる劍の一尺六寸ばかりあるを取り出し是は我が先祖より傳來する名劍なり今汝に預るも依て悪賊の首を取て來るべしと渡しければ民次郎押戴きて申しけるハ道の往來先の趣を考へ合せる小今宵丑の中刻にハ歸り來て鬼彌太が首を御目小掛巾一そへしと言捨部屋へ入て急ぎ支度を取立出るに早酉の中刻に及びたり是民次郎が十四歳の冬十月廿四日の事をり一のハ黑白も知れぬ暗夜あり去ども豪膽不敵ある民次郎少も恐れず山坂谷川の嫌ひなく宛から飛鳥の如く馳せ行きければ亥の刻とも思はしき頃蛭沼が棲家に着よりけり夫より靜かに様子を見見るに間に勝る門牆の結構宏大なり濠幅七間をかり小堀廻し山川を堰き入れたれば水音滔々と山谷に響きて凄しく聞へ橋は拮橋にして用ある時は是を御と見へ向へ引付ありて渡る橋をければ民次郎屹と見濟し凛然と堀を飛び越へて門の戸荒か小打叩きければ小山の如き大男握り太なる櫓の棒を突て立出門の潜より顔を出し民次郎を見て驚き怪みたる有様なりしが夜中に小倅一人堀を越て來りしハ何者なるぞと谷めければ民次郎少も臆せず我と汝の主人蛭沼に用ありて來りし者也疾門明て案内すべしと傲然として言ければ彼男憫れたりしが頓て聲たて汝我主人に逢たしとならハ見事我者

を切れ左なくば道ま去と嘲るを開き民次郎憎き奴が言條か不感ながら望とあらハ是非に及すと言も終らざる小一刀を抜かと思ふと首ハ門外へ落ち體ハ内へ倒れけり民次郎は靜に血を拭ひ門の内へ入りければ此物音小籠き二十人許鬼をも欺く曲者共各餘長刀の鞘を拂ひ破落々と立出でたつ取巻皆聲々に今の手際でハ生置けず打殺せと呼りねれ民次郎大音ふて汝等如き出けら共ハ用事なし妨なすと鬼彌太に逢すべしと言一一同大に怒り憎き小冠者が大言かなッレ打殺して成佛させると轉く折姑く待つたを聲かけながら主と思へて身丈七尺ばかり類骨高く眼八角小切れ髪髻縮み上り恰ハ惡鬼羅刹に齊しき男五尺餘なる山刀を帯換へ鉄の棒を突きづまりくと搖き出如何者共然な爲高の知れたる小倅一人何程の事かあると云つ、民次郎に向ひ儒兒何方の者にして何用ありて此夜中に來るぞ斯云某と鬼彌太なりと云ふる民次郎莞爾と笑ひ汝盜賊がたも流石は首領よくも尋常ハ名乗出たり我ハ此山近き城下の者なるが汝常々強盜押込をなして諸人を惱し害する事甚し依て今宵汝が首を取て諸人の害を除んと思ひ來りしが男振の優しければ命ハ助ハ遣き問向後心を改め盜賊を止め正き業小成く可しと言ければ蛭沼大に怒り汝餘と云ハ小童の身として口の

横に切ぐる儘に大言を吐く奴かあッレ者共捕へよ寸断殺して慰まん疾々と喘急き呼はり
 民次郎打笑ひ扱々運の盡れたる奴等かな然様々傲慢ある上は最早許すまじと刀を抜より
 早く飛び掛るよと見たりしが仁王の如く蛭沼の大袈裟ふ打たせられ兩ふなつて死したりけれ
 ば手下の者共領首を打せてはと四方よと打て蒐るを民次郎前に顯れ後に隠れ飛鳥の如く戦
 ひて瞬く間に三十人許切拂ゆ此勢に恐れけん殘余の小賊蜘蛛の子を散らすが如く四方へ
 らへ逃れ失せたり民次郎の静に蛭沼の首を打ち落し渠の片袖に包み山懸に火を放ち静々
 として立ち去ぬ却説老翁の背より舞もやらす椽側に出て天象を伺ひ民次郎の事故なく蛭
 沼を退治せし様子を察し時刻を見れど既丑の中刻に近れ故最早歸り來らんと待居ける所へ
 民次郎只今歸宅仕りたりとて蛭沼の首を指出けれど老翁黙々その首を拾め見て如何ふも
 蛭沼の首なり天晴ある手柄してけりと顔小歎稱をぞまたりける民次郎謹で申けるは今夜の
 一事をさぞ御稱美下され御感小預る事返すも恥入れり元より小生の願ふ所ハ斯る鎖事
 小非ず萬人の敵を學ぶと申す古人の教肝小銘じたりと述べられ老翁益驚き汝は誠に凡人
 たるらずや伊萬人の敵の事ハ三惑の害に顯せしが未心得ざるかと云れられ民次郎さん

小生の及ふ所ハ既に手に人たれ共未だ相手あければ席上の議論にも及び申さず何卒師父
 公の御問を願ひ奉ると最涼しく言を老翁聞ていしくも申せし者のな乍然今宵ハ夜更ぬれば
 明日致をべしとて其夜ハ寂小就き翌日疾く起出夫より三巻の秘書ひしよの義を難論詰推するに少
 も滞る所なく其辨舌の爽快あること懸河の如く難深の所に至れば却て老翁も及ざるの思あ
 るふど老翁案を拍て感歎一ふりとあん夫より又々晝夜の別なく文武兩道を研磨しけるが光
 陰に關守なく早も民次郎十五歳となりければ或日老翁民次郎を膝近呼び扱昨日今日と思ひ
 たちしも汝此所へ來てより最早五年の春秋を経て我家相傳の秘術も授け終りたれば満足之
 に過す因てハ兼て約束の如く一先故郷小立歸り實父母に對面なすべし我侍考ふるに近き
 中に松井の家に災難來るべし其災ひは汝が兄に當れり我先年市兵衛を千歳山に見たりに
 桓々たる勇士なれ共惜らくは殺を以て身を果すの相ありしあり必ず今年の内が其期なる
 べし又弟要人をも見たりしが幼兒なれども凡人ならず能家を守て父母の名を恥ざるの器
 量あり之小松井の家を繼せ汝ハ父母へ功を立て恩を報じなば必ず歸り來て我家を繼ぐべし
 其頃は我が娘も年頃に成んに依て夫婦の禮を行ひ一族を治むべし決して約小違ふ勿れ今一

心得べき凡そ武道は亂世の用ふて泰平の具に非ず故に汝家小師六經を學び聖人の道を明め政事の缺所を補ひ泰平の飾をなすべし然共迂濶の事をして國の禍を引出す勿れ又汝が武道を以て猥小顯を事努むる可らずと最叮嚀に戒けれバ民次郎謹で承りなごて師父公の御高恩を忘却仕御教戒に背き奉らんや仰に従ひ一先故郷へ立歸り暫て再罷越べしとて夫より老翁に送られ千年山に到けれ老翁民次郎に向ひ此所の先年汝を誘ひし所なれば是れて別れん我天氣を伺に汝と再會せんハ七年小過まじ爾後汝の身の上にて必ず影の如く付添變に應じて助くべし危難などは決してあし只此上と松井の両親小孝養を盡さべし教る事は是迄なり大丈夫ハ別に臨んで涙なし疾く去べしと云捨て迅風の如く元來し道へ歸り行ぬ民次郎はあど伏し拜て起上り日脚を見れば早山の端に入ぬるゆゑ明い中にと例の早足にて寶父母の家門に着きければ覺へず端近迄走り入民次郎只今山より歸參仕つりなりと大言に呼はりけれバ家内の人々は兼て世になき者と思居たる民次郎を大い驚走出で民次郎の顔を見て大に悦びヤレ珍しや民次郎夢にていみじかと右左より取廻りしも理りなり斯る中にも父内藏ハ流石に武士の心得ありて不審なし十年の間に身丈の伸るは理ながら骨

格違しく顔色衰ふべし却て氣色滑澤にして衣類も新しく更小憂苦せし様子なし何様我戀と思ふ處に附近ニ狐狸の跡かきならん必定夫に相違なし眞直に言ハよし若言ハざれば青松葉よていふし化の皮を顯しくれんと怒けるを民次郎聞て仰せ御道理を共決して狐狸などの所業小あらず其理由は私五年以前異人に誘はれ幾山奥へ到しが其異人の住居に日々書讀め又衣服飲食を與へ異人の自身にて薪を樵り水を汲み食を拵へ某を養ひ呉れし故手足も勞せず年月を送り待ぬ昨日異人の中には既や約束の日限來れり因て明日ハ汝を伴ひ故郷へ歸し遣すべしと言しが今朝建立て歩む共なく走る共なく唯夢路を辿る心地にて計す此門前へ歸來りし小異人ハ鳥の飛が如く走り去れり之小因て年來戀き伊兩親の傍顔を拜せん事の嬉さまゝに急ぎ参りとり毛頭狐狸などの類にあらす疾疑ひを晴し給はれと申けれども父ハ猶も疑ひ晴ぬ氣色を見て兄市兵衛不圖心附年久く飼置けるひた白と云猛犬有まを呼寄ければひた白ハ主人の聲を聞尾を振て來れり元來民次郎ハ幼少の時より不便がりて能懷たる犬されば少し見忘す民次郎の傍へより狂ひ懸て餘念なけれバ民次郎も悦び白かくと脊背摩り愛するに予内藏も漸疑ひを晴し夫より年來の様子を尋ね悦の酒宴杯ありて家内皆々

醉を盡きて見えたりけり扱翌日ふなり民次郎の一室小引籠り萬事を拾遺き夜を日下で學問のみに心を碎き更に餘念なけれバ兩親の痛く心を煩はせ年若ある者が餘り讀書に凝る者若や病氣にても出やせんかど種々物め論けれ共更に用ひず何事も書物の外の心を慰むる者なしとて只管に籠り居に予父母兄弟も民次郎の狐にでも迷ひ居て出家に成んと思ひ立ぬと見えたり那の如にてと迎も武士ふ成得がたしと心を痛免れバ一類戀意の者迄も或と叱り或ハ諭しなきまける小民次郎少も頓着せ馬耳東風小聞き流しぬ是ぞ後雷名を世に轟き基すと絶て知る者無りけり

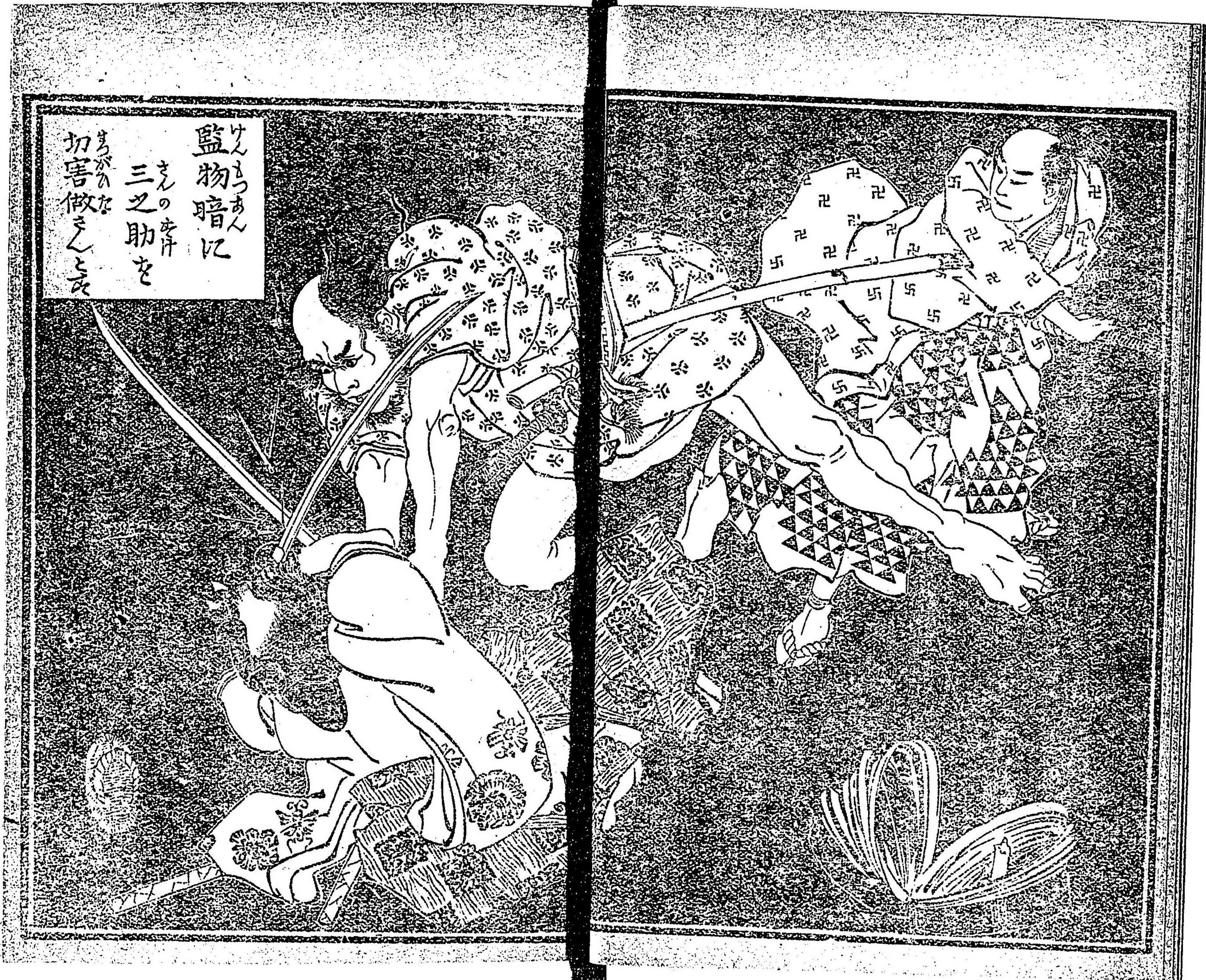
第二回

意馬狂て其身を滅す
熊勇を恐て却て嚴戒す

人は情慾に制せらるゝの動物なれば女色に洩すを得ざる時ハ必そ男色に洩すの道理にや古來和漢共治世小の遊女なる者有て戰國小の男色行ける漢土に在てと後漢の末より晋の代に行ハれ我邦に於ては鎌倉は頃より行はれ遂に徳川の初代の頃ハ武道の花と唱へ歴々の方なき競て美童を召抱るふ至れりとかや然共慎むべきの色慾の道すか一其身を滅し其家を

破るは多く色情に溺るゝよと起るの微塵もまたあり其頃加能越三ヶ國の大守前田中納言利常卿の家臣五井主水と云者の妾腹に三之助と云ふ一子を儲けたれども本妻に三人の男子ありければ末子と云ひ殊に妾腹ゆる母方の苗字菊池を名乗せ他家へ奉公させ度と深き思慮ある妾の請に主水も道理なる事なり大勢の兄弟一所に在ると却て後の爲なるまじとて内縁もあれば松平下總守殿へ小性奉公小予出むける當時ハ天下一統に俠客流行なし又大名方は榮譽として美童を擇び抱へる家多末元來下總守殿ハ小性を好と給ひさるるも只世間並に抱られし事をせさしも北國無雙の美童なりと譽られたる三之助も寵愛あく深山に咲し櫻木の見る人もなく仇に散り行如くなるを人皆惜ぬハありけり然共廣き世間小の藝喰ふ虫さへあるなういなればなきて斯る天姿麗種類ひなき美花を手折らざる事のあるべき予戀は曲者何時の程よりか松井市兵衛と淺からぬ會笑の情を通じ居るを知らで人々が無益に思ひを焦す予益なし爰小同家中小高橋監物と云る者あり三百石の祿を賜り武道も形の如く隠しが生れ付ての男色好にて三十近兒迄無妻にて暮せしが偶三之助を見初てより戀風身に染みてあかく寝ても覺てもわすられず思ひ小堪かね仲立を頼みて深き思ひを飽嘗て對

監物暗に
三之助を
切害做さんと云



と込め度々送るといへども三之助の手にはだも觸らず突き返せし所も近江陸奥の名も立たる錦木の仇に朽行無念さよと監物腹小据へ兼て吃を一書を認め勘送申入るれ共只一言の返答さへなま玉はぬころ遺恨を此上は是非に及ばず出會節の有もせば日來積りし恨みの程を申すべし豫てきな心得玉へとの趣きを言贈りなれと三之助之を見て仰の程承りぬ厚き思召の有難なり共此儀計の幾重も御免を蒙りたし路次にて御恨仰せ聞ゆるべきの段の覺悟の前にあるをれば御勝手になさるべしと答へけるをなす時に慶安元年二月二十七日の夜三之助の泊番ゆゑ心なく一僕に提灯を持せ横町口より登城せんと來掛りしが時節にや有けん馬場先より高橋監物只一人伴をも迎れず此方を指して來り行過んとせしが提灯の紋を見て如何ふ夫へ來り給ふの菊池殿と見請たり屈竟の所ふて御目も懸るる嬉けれ日頃の恨み思ひ知り玉へと云も終らず板打小提灯とつさり切落せを僕へ仰天氣を魂も失果て轉つ起つ何所ともなく逃去たり三之助の少も騒す何に恨とは奇怪千萬返答は斯うあると抜合せ受つ流つ切結びなきが如法暗夜の事なれば目當も知らず滅多打ち戦ふ折柄三之助の運や強かりん情人松井市兵衛所用有て此所を適合せしが三之助の聲を聞き付れ大に驚き菊池殿あるか

松井市兵衛助太刀をど云より早く一刀抜き放し監物か後より切付れば急所ふや當とけん憶と前に予倒れ伏ぬ頓て市兵衛乘り掛と止を刺して口鼻に手を當て倒けるふ最早事切し様子あれ共猶足を持て四五箇引摺り見しも更に動ず全く死切たり茲に於て市兵衛心靜に腰の巾着より火打取出し切落したる提灯に火を移し墨斗取出し手早く委細を書認め竹小挿みて死骸の傍に建置しかば三之助悦び既に一命危き所を御救ひ下され悉なしと云ければ市兵衛何の禮謝に及ぶべきかばかりの事の當然なま去るがら斯成上の一刺も早く立退に如すと三之助か手を引て飛が如く小落行けか暫有て夜廻の者之を見付大に驚き喧嘩くと行とるふ今諸方より人々馳せ集り市兵衛の書置を見て急ぎ夫々へ届け松井高橋の兩家へも知らせけれ内蔵の眼より追取刀にて駭來しに監物の弟高橋九郎兵衛(別知百五十石)も駭來る其内小組頭三好頼母大目付近藤治部盜賊改奉行筈七郎も下役を召連出來り死骸に立會吟味せし處市兵衛の書置にて事明白なれば萬事の上より御沙汰有之まで内蔵殿にも御儀有べく又九郎兵衛も同様たるべし且死骸の九郎兵衛方へ引取べしと下知ありければ九郎兵衛畏まりて家來共に申付け引取んとせしに未盡ぬ定命ふや前刻市兵衛が止を刺したりとぞ思

ひまの耳の根をかすり芝生へ強く突込たるをわいと息吹返せしに一同驚き急ぎ御手
 醫師林春達外科山本慶庵を呼び治療をなさしめしに兩人篤と容子を伺ひ疵は急所を外れ
 殊小容体も宜き故療治行届申すべき由述けるに予立會の役人然らば療治を加へられよとて
 監物を九郎兵衛に引渡し去より三好近藤寛の三人の直に家老山田繼殿助の方へ行て委細是
 間の趣きを申述しかば翌二十八日繼殿助登城なし式日の嘉儀畢て後同夜に向ひ前夜喧嘩の
 次第を披露なし一同御前へ罷出委細申上げれば下総守殿先雙方共に遠慮致居り尤の儀なり
 乾と相憤み罷在るやう申し付べし別て監物は随分療治を相加へ手疵本腹次第申出よと仰せ
 渡されしに年寄中何も畏り御前を退出して兩家の親類を呼出し委細申渡しけり然程も監物
 と手疵思の外も淺かりま故日を追て癩々二十口許も全治をしなければ早速役人中へ届を出た
 を翌日親類の者監物同道にて登城致せとの達しに付罷出たる所年寄始 諸役人一同列坐
 の上出頭家老山田繼殿助座を進て高懸に此度高橋監物義菊池三之助に非議の中掛致ま助太
 刀市兵衛と喧嘩仕る段像の御法度を背き加之不始末の体裁武士に似合ざる所業を逐一
 御聽に達し以の外の儀に思召さる 依之改易申付らる、に付今日中に屋敷引渡ふ可し家老

と第九郎兵衛ふ下し置く、なり引取申すべし尤も一類の者其屹と差扣へ罷在標にぞ申渡し
 けれと監物始め親類共一同ハツト計に恐入平伏して仰の 委細畏り奉つるとの御請ふ
 して何も面目なげに罷出たま又松井内藏への市兵衛儀義菊池三之助が助太刀を爲て高橋監物
 に手紙を負せ趣電致せし段不届なり然共書置を殘を置たるハ火急の場所にも武士の心得を
 忘却せざる條神妙に思召さる 殊に内藏は始終を存せざる儀に付只今迄の通り役儀相勤候儀
 にと仰せ出されければ内藏の面目身に餘り難有旨御請致て退出せり扱を高橋監物の改易と
 成しかば早速家財を第九郎兵衛方に運せ獨身の心安ハ故郷に思の殘る事も無家來共に暇を
 錯謫代の家來谷澤雲八矢東繁右衛門の兩人を召連貯金を携へ國を立退れまが元來意氣雄な
 兒男なれば市兵衛を尋ね出ま打果さんとの存念もなく攝州大阪の所縁へ便寄て事を爲んと
 難波を指てぞ登る却説松井市兵衛と二月廿七日の夜高橋監物を打果て其場より菊池三之
 助と同道なして直橋山形表を立退き江戸に到り濱町邊の知音を便寄て身を隠居たごまか
 せ或時三之助に對ひ云るやう兩人何時迄も同居去て有んには早晚隠居へ聞へんも計がなし
 若然ある時第一御主君へ對し恐れあり又親にも不孝に當る耳ならず何となく後先たき事

故其計は幸ひ故郷のことにまれば一先加州に遷き親元に身を隠して山形の様子伺ふべし其中心機を見合せ我も跡より参るべしれハ疾々思ひ立れよかすと勸めらるに三之助涙を淨べ只今迄一方あらぬ御高恩を蒙りし其されを何所迄も命の有ん限り御供仕る覺悟に待りしなれども武士の義小背との御辞ゆえ是非なく仰せに從ひ加州へ罷越可一其中貴君も機を一見合せて必ずとも御尋下された一其のみ御待申すなりと最懇に暇乞して出立よ及けるが今更の別れ塵を断る、悲しみぬすれ共流石婦女子の愛戀に齊しらんを痛ぢ涙を看で別れたりけり斯て松井市兵衛只獨となり山形の様子更に知され心江戶詰の同藩士に出會せんことを慮かりて狼狽外出もなぞす扣へがちにて居たる所へ國許の家來安郷新五右衛門突然尋來りしかハ市兵衛大に驚き且悦び如何して我か隠家を聞しか一御両親は恙なきやと問へ新五右衛門先以て御健勝の御尊顔を拜大慶の至に存じます御國許大旦那様始與様民次郎様御機嫌克入せられませすれハ御安心遊ませ貴主様去月二十七日の夜に御立退の後大旦那様種々御行先の事を御案じなされしより私一國許を發足いたし漸御當所ならんと思ひ當り尋て参りました御内々の御用の趣きの御書面中御慮ますとて内藏よりの御書を

渡し暇ひありし當夜の後の始末を逃けれハ市兵衛監物が蘇生せしと聞て大に驚き其の書翰を披き見るに三之助へ助太刀致して立退しハ武士の常にして苦からず殊に御前の首尾も宜けれと相手の生死を見届すに透電いたせしハ憐たる致方との誹謗遣れ難し只此上と一日も早く監物を打果とべし當の敵ハ滋州大阪へ登しやに承れり且路次の費用とまで金子百兩差送るなりと有けれハ市兵衛切齒をなし扱々殘念あるかな生憎彼夜ハ眼病を煩ひ居りし故二刀迄止を刺たりと思たるが誤りなり一ハ狼狽者との父上が御立腹は御道理なりいで此上ハ日を移さば大阪は登監物を打果さんとして新五右衛門小向ひ御返書仕るハ透電者の身分にて恐れ有は口上にて申上くれよ此度仰せ下されし御書面の趣き委細承仕つる且金子迄御心附下されしハ重々の御高恩有難く存じ奉る尤も監物を討ち果さる中は御安否を伺ふまじと懇に言合先山形へ不歸しける夫より市兵衛と直さま江戶を發足なま陸路を取て急ぎ大阪へ登りたり是實に慶安元年四月十日のことにてありける斯て松井市兵衛は日數十日を経て大阪に着き其以前父内藏の召使し若黨なるが當時は商家となり中の島なる播磨屋七兵衛と云者の許へ便寄委細を咄して願みけれハ元來此七兵衛は俠氣有者なれば大に悦び町人

風情の私を男と思召遣々御尋ね下されしは身小取て有難死仕合なり御不自由さへ御堪忍のされ五は、何年あり共御逗留遊さるべしと女房俱々喜びつ、殊の外馳走を以て饗應にぞ市兵衛も大に心落着此家を居所と定免今日此所明日は彼所と神社佛閣を始め毎日々々油断なく徘徊して監物を尋ねけるに時節や来りぬん四月二十九日の正午頃天満の方へ行きしふ神ならぬ身の監物何ぞて市兵衛の付狙ふを知るべきや編笠をも冠とせ只獨り向より来りしを市兵衛早くを見付如何に夫へ見ゆるは高橋監物ならずや我の松井市兵衛あるぞ先達て汝が虚死なせしを誠と心得討渡せまこそ無念なれ其恨を晴さんがと免遣々後を追来りしなり尋常に負勝せよと名乗り掛しかば監物も然者莞爾と笑ひ過し節の闇夜故思ぬ不覺を取て諸人の吻を請残念なりしふ能も名乗て来る者かないで我白晝の手續を見せんと云より早二尺五寸餘ある河内守國助の鍛たる一刀を抜き放し打て境れば松井市兵衛も同く天正助定二尺七寸五分の一刀を抜き連れ丁々發矢と火花を散りて戦ひけるが小野派一刀流の達人たる市兵衛は何條監物の敵をべき見る間に受太刀となりければ市兵衛得たりと一聲叫びながら横さまに拂ひければ隣むべし監物は兩にありて死たりければ山なす見物の群衆一同にドン

ト響ける聲暫時は鳴も止まざりけり市兵衛の手早く刀を抜き鞘小納て其場を立退かんとすれバ皆々始めて心附き夫れ喧嘩の相手を逃すなど騒ぎ立中を走せ抜け一丁餘も来りし折柄伊大納言頼宣卿参勤あり玉ばんとて供進殿く通り掛ければ市兵衛是を見て天の誘く幸ひと思ひ遙此方に平伏して大音揚此所を通らせ玉ふは恐ながら紀伊大納言様と見奉りぬ私一人を討て立退く者なれば御憐愍を以て御庇蔭下さる、やう願ひ奉ると呼ひければ大納言殿「ソレとの御意小御供の人々破落々と市兵衛を取巻き御乗物の前へ同道なせば大納言殿吃と市兵衛を御覽せられ意趣討なるの讎打なるかと問てせ給へば市兵衛平伏なす意趣討にて御座ります是方二丁程天満の方にて勝負をせしなれを備なすぬ證據の爲め御人を遣され御見聞を願ひ奉ると音聲常の如く脚も滞る事なかりか大納言殿御感有て何れも此所の途中あれと旅館へ召連参るべしとの御意なりけるゆる市兵衛の御供の御同勢に打交り御旅館へ到りける然れば群衆の町人共へ唯あれよくと云ふのみ最早紀州家の御同勢の入室しされば如何共陰方なく切られし人の委細を町奉行へ届ける所て大納言殿の御旅館へ御参りて松井市兵衛を召出され御尋ねりければ市兵衛畏り國許よりの始末を詳らるに御答

へ申上げたりければ大納言殿迄と其容子を御覽せられたる小人品骨格と云ひ武藝と云ひ辨舌の爽快なる天晴天下の英傑と思し給ひしもの甚く御感有て向後我に奉公せよと仰せられければ市兵衛忍入て平伏せししが暫らく有て頭を上げ不肖の私風情に御懇の御意を蒙るに己あらず御家臣御召抱へ下さるゝとの御儀無加身に餘り有難き仕合に存し奉る然共只今申上ましたる通りの譯なれど一先國許へ立歸り親共へ此仕合を申聞せたくは只今直に御奉公申上ての儀を恐て當御家の御庇蔭を受たて杯と人に誹らるゝも口惜きにより何卒一先御暇下置るれば再歸參仕つり御馬の口など取て御高恩の萬分の一を報じ奉るべしと詞涼しく申上げれば大納言殿益御感有て能も言つる者かな武士の意氣地道理の事なり然らば其方の勝手に任せん必ず再參るべし先夫までの驗なりとて御差替の關和泉守兼定の二尺五寸あるける刀を御手自かゝ賜りたれば市兵衛武士の面目此上あるまじき謙で頂戴なし御前を退出なしたりしが夫より悦び勇んで大坂を發足にみよび夜を日に繼て江戸へ下り委細の運きを書認め飛脚を以て國許なる父の許へ申し遣けり又公儀の役人へは紀州家より當家々來松井市兵衛に兼て殿討免許あり置し所此度首尾能討果せりとどの御達ふて相評みたり扱

又大阪にては監物が兩人の家來喧嘩の噂を聞くと其儘駆け付たりし早主人の討れ市兵衛は紀州家の御庇まいとなりたる後なれば拳を握り切齒をなして憤れ共今更詮方なく一人の家來矢東繁右衛門と死骸を葬り今一人の家來谷澤雲八の直小同地を發足あして晝夜の別なく急て山形へ下り五月十六日に漸と監物の弟高橋九郎兵衛方に馳若て委細の様子を語ければ九郎兵衛大に驚き暫の間は口惜涙に咽せ居りしか屹と心を取直し斯女々敷して居る時ならず此上の一日も早く離市兵衛を打果し兄の妾を晴さんものと早速離討の願ひを出しければ御聽届となりけるに九郎兵衛大いに悦び急ぎ支度を整へ家來離田半平谷澤雲八の兩人を召連れ十八日の早朝山形を出立なし先江戸表へ趣て神田邊に店を借受けて住居如何にもして松井市兵衛に廻り會へんと神社佛閣を拜し兄の誼を討せ玉へと立願あして或は淺草上野芝の勿論堺町吹矢町木挽町など人の多く入り込む所を尋ね廻て行たれども更に手掛りなく兎角する内に早晚三伏の暑も過ぎ涼風催す秋の初に成ければ九郎兵衛如何せん途方に暮れて居たりしが不圖一計を案じ出し彼當地を去べき筈をまいで偽出して呉んとて日本橋の詰に高札を建て山形浪人松井市兵衛義大坂ふて自分兄高橋監物を討取御當地

に隠れ居る事必定あれ共我を恐れて逃忍ぶと覺えたり誠に臆病の至り腰拔武士とて此者を
 亡ふあり若かく誘ふるゝを無念に思ひ、早速罷出勝負なきべし出會の節日頃の手練を見せ
 んものなり慶安二年七月十日高橋九郎兵衛と認めければ忽ち江戸中の大評判と多なり小
 ける爰に又松井市兵衛は濱町なる知音の許に居り國許なる父内藏の返事如何にと待居り
 小飛脚を以て早速返書到來なしければ取敢て披見に本意を達して悦べり就て此許高橋九
 郎兵衛兄の隠打として當月十八日發足なしたり必ず小敵とて侮るべからずとの事なりけれ
 ば扱て九郎兵衛が隠討に出たりしか高の知る奴何程の事かあらん見よ〜今返討ふ
 て呉ん然共父上の誠免も黙止がたし慎むに如すと要心あして在けること殊勝なれ然に七月
 十四日に所用ありて日本橋を通りかゝりければ人群立て在けるゆゑ何事ならんと立止りて
 不圖見仰れどこはそも如何に高橋九郎兵衛が自分を釣出すの高札なれば市兵衛大に怒り憎
 き奴免が仕様なと夫より直に旅宿へ取て返一高札を調整なして來り市兵衛もまた日本橋
 の許に高橋九郎兵衛兄監物の隠を討んため御當地へ出たる由武士の本意しからしき事な
 り然共我等臆病ふて逃隠れ致またり杯とは以外の過言なり我の逃も隠も致さる間場所

日限を定て猶高札を建へま若返答なきに於てハ市郎兵衛却て大臆病の者たるべきなり慶安
 二年七月十四日松井市兵衛と認めて建たりぬるに九郎兵衛ハ松井の勇氣にや恐れん其後一
 向に沙汰あくて過しかば江戸中擧て松井の勇を賞ま高橋か始の仕方に似合ぬ臆病を笑とぬ
 者予なかりける市兵衛ハ豫て紀州家へ奉公致さんと思ひ居たりしも此節ふありて彼御家
 小仕へ御威光を借たり杯と陰口言へれんも口惜ければ高橋を討取て後の事ふせんと彼方此
 方と尋廻り居りしを高橋聞出して大に恐れ斯れば無作と小勢にてハ出行き成難しとて當時
 江戸に流行俠客を語ひ大勢運ふて他行なしける故流石の市兵衛も容易に手を下さず事あらず
 一日く延引する中ふ運の傾く時節至りてハ良將勇士も之を防ぐ能はざる喻の如く九月
 上旬より市兵衛偶然風眼を煩ひ咫尺も辨へ難くありけるを淺草御門内の眼科某の癩治
 受日を追て快氣ふ赴きしに折悪く其醫師時の氣ににや冒されけん病床に就て見舞意りまか
 ば市兵衛ハ快きふ任せ杖に助られ忍んで醫師の許へ通ひたりしを九郎兵衛早も聞出し天の
 助と悦びつ、二人の家來并に俠客らを招き此頃松井市兵衛の様子云々なれば渠が醫師へ通
 ふ日を能開正して置先へ廻り待伏して討取らんとの相談決し夫々に手筈を謀合せ淺草川の

端ある明地(今の兩國橋の邊)に今や來ると待伏するよと卑怯なれ斯る狡計の有りと市兵衛何で知り得べき編笠を眉深に被り杖ふ助られてとぼくと來掛りけるを見て九郎兵衛突と前に出て立塞り如何に珍しや松井市兵衛先達て汝が手に菟り非業の最期を遂げ玉ひし兄監物の執安を晴さんために高橋九郎兵衛尋ね参つたよと立合て勝負せよと呼はりければ病老たる市兵衛編笠脱捨眼を活と見開きながら卑怯至極な高橋九郎兵衛討成はな尋常に出會を望まざる我が眼病を付込み待伏して討んと見下け果さる腰抜れぬ假令盲目同前ふりともやてか汝等討るべきと紀州家より拜領の兼定を抜放し盲なぐりに確立れ九郎兵衛持餘し二足三足送巡して受流す中に二人の家來共突と進み棒を以て市兵衛の両足を力限に拂ひしかば流石の豪傑も目見ぬぬ相手の聲を知るべに切込機故前ふかつとと倒る、を向猪伊八と云ふ俠客得たると飛込來る所を倒たつ横に拂へば伊八胸中より二ツに成て死てなりされ共多勢の事ゆゑ起しも立す踏込々々切付る小惜むべし無雙の勇士松井市兵衛氣判も繪の如くにありて無念の最期を遂げたりけり九郎兵衛主従い日來の本望を一時に達せしと歎びたりしが一隊の者ら跡を晦し行方知れず立退たり市兵衛の小者時助が使の

出先に喧嘩の沙汰を聞其坊へ馳付て見ればコハツモ如何に主人市兵衛寸断に切殺されて有しかば仰天なし等を搦り頼々足踏で口惜がりしが最早相手は逃失て行方知れざるゆゑ何は兎もあれ此事を御舎弟要人様へ知らせんとて奥平美作守殿の邸へ馳付けたるに要人は早も此沙汰を聞て役人に断り追取刀ふて馳出來るに確と往逢ければ何を言問も急がせ玉へと諸共お彼場所へ馳付て見れば無殘や兄市兵衛は目も當られぬ迄に切断されて有しに胸塞りて暫が程の物をも得言で有りよりしが斯て有べきよあらざれば早速此旨を届出檢視も頼て濟けれバ死骸を濱町なる市兵衛の浪宅へ引取其夜野邊の送もそるに營み翌日早朝時助を飛脚として委細の始末を山形なる父の許へ知らせ遣り要人は七日くの法事を最懇に吊ひし遠親身の兄弟とて實に頼母殿ぞ思われける

第三回

豪傑の思ひ既に非凡なり
明主已を損して益を受く

爰説山形表ふての悲しき凶變の有ぞとの夢も知る今頃は梓市兵衛が定めて紀州家へ召出されしならんと手を思ふ親心を贈のとして居たりしに九月廿日の朝まだき何時も一室に立



民次郎
老翁に遇ひて
宝剣を授かる

籠りて居る民次郎、悲しく父内蔵の前に出て、私昨夜天文を伺ひ見たりし、江戸表の兄上が、高橋九郎兵衛に討れさせ玉ひたりと、覺ぬ高橋如死に討たはふ兄上、小の在まはさ、共御武運の盡させられしぞ、是非及ばざるなと、とて、潸然と涙を流さければ、何事も知ぬ佛の父内蔵は、餘のこゝとみ興をさまし、汝の何か、稱宜山伏の言ふ如き、談藏たことを吐す、奴かな能物を考へて見よ、儘隣の事さへ、知ざるに、奚山川數十里を隔てたる、江戸の容狀の、知れべきぞ、夫を、誠と思ひ正々しく云ころ、可笑けれ、未狐小証、されたる迷の晴ぬと見へたり、何れふても、思々數ふとを云者かな、向後正氣にある迄、父の前へ出る事、ならぬぞと、怒り罵りければ、民次郎、思はず父の氣を損つてけり、と、已が部屋へ入り、ふけり、斯て四五日過ると、江戸表の要人方より、小者時助を飛脚として、來り凶變の次第を、物語猶委細の御書狀にありと、差出を取手、運しと、披見て、内蔵、殊の外愁傷なし、今更民次郎が、先日申せま話しを、思ひ出し、急ぎ民次郎を呼び、要人の書狀を見せ、て、其方が先達て、高橋九郎兵衛の發足せし、朝江戸へ登りて、市兵衛に、附添一臂の力とならんと云ひしを、柔弱者の助を頼む、市兵衛、おらすとて、叱り止めしは、今更後悔なり、元來、再敵討て、天下の法度去、迎此儘に、九郎兵衛を、安穩に置ん、返す、くも、殘念ありと、云者の、汝の、天文書、結

の事、の學得て、明らか、あつんが、武道は、一向に、知るまじし、かれども、要人一人にては、未ば、幼年なるも、多覺米、あしと、歎息、えられ、心、民次郎、謹で、仕事、の谷ても、詮あし、恐れある事、あがら、父上、よは偏小、武道に、の、御達、練にて、文事、の御存、し、あき、故さな、御歎息、な、さる、れども、凡そ、文事、なるもの、必ず、武有と、聖人も、仰せられたる、如く、私を、武術の、心掛、一向、なき、よし、も、非ず、平常の、武道の、業、の、致さぬ、心得、なれ、共、御心、休のため、御覽に、入んと、屹と、庭前、を見、やり、折節、し、築山の、松の、下、枝に、馬止り、居しか、バ、徐々と、庭に、下立、扇を取、礎と、打よと、見えたりしが、忽、鳥は、地に、落て、死たり、けるを、持來、父の、前に、置たるに、鳥の、頭、微塵に、碎けて、ある、ふ、ぞ、内蔵、大いに、驚き、今、汝が、庭に、下たる時の、眼ざ、一氣に、閉ひ、手筋の、常な、うざる、我、此年、迄、忘らず、鎗術を、心懸けたりしも、勿々、及ばざると、百尺、樓下、なり、汝、の、子、あがら、も、不思議の、人、あり、我、眼、暗く、して、今、迄、見、誤た、まじし、の、甚だ、恥入なり、此上、は、早く、讎を、討て、兄が、妄執を、晴し、我、無念を、散じ、良よと、かき、口、説ければ、民次郎、仰に、や及ぶべき、必ず、御心安、思召、さる、べ、之、假令、高橋九郎兵衛、天に、翔り、地に、潜むとも、や、ハ、か、生、置申す、べき、就ては、一ツの、御願、あり、首尾、能、離を、討取て、歸り、來、つ、む、弟、要人、を、相續、小御立、下され、私、は、生、涯、仕官、到、さる、存念、な、れ、バ、此、段、御、聞、入、下、され、た、し、と、言、ける、ゆゑ、父、内蔵、聞て、夫は、如何、ある、念

願かは知らぬが家の爲にだにゐることならハ其方が言ふ任すべしと許せるゆゑ民次郎大いに悦び夫より支度をして頓て山形を出立ぬし父の命小従ひ道すからあれを奥州三春に在す叔母公の方へ志し行たりしが羽州上の山の城下迄來し時偶然思ふ様常小人の行通本道へ面白からず是を山越に道の有と無とに限らず分行は大概阿武隈川に出んと豪膽にも思ひ立て夫より山の險岨を嫌ひ谷の深遂も厭はず川の危難も憚らず進行するに早日暮方となりぬれを何所ぞ能所小野宿せんと此所彼所見廻す折かす遙の向ふ樹木生茂りする中家居らしき者ありければ兎も角も彼所にて一夜を過さんものとして行て見れば最もいぶせき草廬にして矮小けれ其正しく人間の住居して有と覺ゆるに民次郎靜に行啓て困難する者あれははれ一夜の宿をかじ玉へよと訪ハ内より一人の老翁出てさをも不審さうなる顔容小民次郎を打視ると安きことにはあるあれども元來此所は人里離れし一軒家なれば夜の物具飲食の準備を夫もてを苦からずは入り玉へと更ふ五月蠅と思ふ氣色なれば民次郎悦び兼て野宿せんと心得し程なればあどて餘分のみと望むべき只一夜を明させ玉とバ満足之に過す御免あれと内に入り熟容子を見る小只四壁のみにして雨露風霜を凌ぐに過す炊具杯と見ゆるも

の一物もなく床とも覺しき所に何かは知らぬと數部の書籍あり又其傍らに古びたる錦の袋に包み在中緒ある刀劍と覺えたり此家の主老翁の年は夫とも定免難きが髪髯ハ悉く白を過て黄色となり絶て剃刀などを用ゑることなきかして蓬々たり容顏頗る憔悴たるも何となく氣品高くして凄々有バ如何にも賢徳ある人が世塵を厭ふて此山に入りたる陰士とこそい見られけり民次郎恭しく問けるハ斯人里離れし山中小只一人御住居なされるは定て深き譯あるあらんが苦からずバ御聞せ下されたと云ければ老翁莞爾として笑ひ御不審ハ最ふれ共差て御話申ほどの者ふてハ無とて更に身の上を明さずして云けるは元來此所は是迄人間の來とし事なだ山中あるに其方ハ何用あり如何致して參られしかと尋ねられ民次郎恭々く如何にも御遺理ある御不審なりとて是より兄市兵衛の隣討の爲山形表を渡して上の山へ出んとする者人の通らざる所を行んと思ひ立るとより此小到りたりとの始終を詳く物語りければ老翁頗る點頭てさもあらんくとして民次郎の容貌氣品を熟眺め居たりしが不圖心附たるか熱したる柿栗栗を持來て云れるは定めて飢つらん然共先刻も申ことハ斯る山中の一軒屋なれば飲食の物さうに無きゆゑ之ふても召食れよとて與へるとるに民次郎何よりの賜

千萬 忝もあとして二ツ三ツ食害に甚美味あり夫より寝に就んとせんに老翁云ける夜の
 物具もなれば嘸予寒らん之を掩ひ玉へ夜寒を防の足しともならんと敷物を與ふるに任せ
 民次郎受て上に覆ひ寐さるに頗る暖なり頃は冬の初にて四方の巖嶺を立す山中寂寥と
 して氣寂び心澄て勿々凡人の眠る事成まじりに固より不敵の民次郎あれは少も心を置ず高
 射して寝入りたり斯て夜明ければ民次郎目を覺えて見るふ老翁と寐たるにや寐ざるふや夕
 の儘にて居たりしが民次郎を見やり早も起玉へる者かあ迎朝餐とも云可か又柿梨杯與へ夫
 よと容儀を改て民次郎に向ひ云なるは我昨夜より其方の容子を伺ふに人品骨格と云ひ舉動
 と云ひ古今稀ある豪傑なり就ては我其方小授る者あり是は我が先祖傳來の寶劍にて刀鎗矢
 鉄砲の通らざる怪獸にても容易打取るべき手裏劍又是は諸の毒禽獸の惡氣を消せ妙藥なり
 凡そ豪傑の世を渡るは種々の艱難異變に遭遇と多き者あれは其時の備貯にすべしと與へけ
 るふぞ民次郎謹て不承なる某當らざる御賞美を蒙るのみならず殊に類ひ稀なる重寶を御授
 下され有難き仕合なりと述けれは老翁其人を得たるとめか欣然として云く其方が凡俗の人
 ならば何として爰に來らるべきぞ其方の此所ふ來るは深き縁有ての事あり又我が寶劍奇藥

を授くるも縁なり強ち謝するに及ばずと云けれは民次郎再拜して懇に服乞なし此所を立出
 夫より心覺の方角を指し幾多の山川を越て阿武隈川に出たれば道を往還に取し三春の城下
 に予着にける抑く三春の城下と申は秋田河内守季俊殿とて昨慶安元年の春此三春を拜領
 せられて入部ありけるが元來名家の流れなれば家中多き中に秋田河内守兵衛と云るは河内守
 殿の支族にして一の老臣あり此四郎兵衛の妻は松井内藏の妹にして内藏の妻は四郎兵衛の
 姉をれは父方にも母方にも民次郎の爲は叔父叔母なれは今民次郎が尋ね來るを見て
 大に悦び互に無事を祝し且市兵衛の横死を歎き以此度讎討のために旅立したる始末など斷
 て父内藏の書状をも渡まけれは四郎兵衛夫婦悦ぶ事限なし民次郎も心置なく踏着て逗留を
 し居たりしが或夜不圖天文を見て何か異變の兆ふても願れしか驚きたる体にて四郎兵衛の
 前に來り溜息つきて申しけるは私し幼少より天文を好みて夜々天象を伺ふを事ぞせしが今
 夜の様子小では當御城主に甚た危き事あるべし然其陽星有て君の側を離れざれば危難は免
 れせ玉ふるふんと四郎兵衛之を聞て礎と手を拍ち扱々其方へ未だ若年の身なるも奇才あ
 る者かな傳聞く昔の陰陽博士阿部の晴明にも劣るまじ其際ハ當國根本の山奥小巨蛇棲て人

害を害し田畑を荒し諸民の困難に及ぶの數年なり然るに當主河内守殿は勇猛萬人を勝れ玉
 ひしゆる此事を安らぎ思召れ明日御自身も退治なさせ玉へんと妻故我々老臣共御諫言申
 上たりしかども勇士の一言外へ出せる上へ返すべき所なしとて却て御供進も禁られたり去
 迎打捨て置くべきなふされバ我々も忍び隠れに夫々手筈を備ゆる相談をなし置たりと語け
 ければ民次郎聞て熟考へ居たりしが稍ありて四郎兵衛に向ひ卒爾なかつ其儀ならバ某が見
 へ隠れに御供仕り萬一御城主小危難のことあらば寸志の御奉公を申し上たし此儀如何に
 ぞと述べれど四郎兵衛感賞して流石は武士の子儀くも思ひ立ものかな我に於も満足せり然
 共其巨蛇の幾百年を経たるにや頭神事祭禮の獅子にも倍せりと聞ゆれを勿々筋骨の堅まら
 ざる腕先小てハ叶ふべくも思はれず止るべしと云ひければ民次郎御咄の趣にてハ其巨蛇鐵
 砲も當らざる必す狂ひ狂て御城主を退奉らんハ矢の如くなるべしとある時は鉄砲にて打すく
 めんとするも殿と巨蛇との間近ハ鉄砲を打に所なからん因て私御供仕らば假令巨蛇山の如
 なりともやはか生置きさんや曲て御許し下さるべし若殿よ御谷あり一時ハ御取成を願
 ひ申すとて止る氣色更になれど四郎兵衛も道理ある言に腹し然らんとて覺束なくも其

意に任せたり對て翌日に成ぬれを河内守殿當年廿三歳其頃勇猛無雙の聞えありし若將あり
 二無栗毛とて三春第一の駿馬に打跨 鉄砲の上手なる若者四人を召連何れも百目の鉄砲
 を携へ根本山小到り近邊の百姓共に巨蛇の棲所を案内させれば遂に彼方を指し向ふの山
 の半腹に平なる處見之申せり那上へ日毎に出るありと言上なまければ河内守殿篤と聞玉ひ
 て百姓共をみな家に歸去して鉄砲に各自玉藥を込用意を充分にあり置河内守殿大音揚て如
 何に北山に年來なんぢ巨蛇棲をな一人畜の害して田畑を荒すハ奇怪なり之に因て城主俊季
 討取ん爲出馬せり早く出よと罵り玉へバ不思議や件の岩上に朝日二ツ出しが如く見えたる
 ハ巨蛇の兩眼なまけりこれ巨蛇が人氣立たるを知り香を食へんとて出でしならんか俊季
 殿汝只一打ふまで呉れんと強張の鉄玉火蓋を切てさうと放ちたまへバ四人のものも筒
 ぞき揃へて一度に打りし玉ハ中りたるを見て後ろの方へ隠りたるが忽起上り此方を
 目懸て追駈來れば豫て約束の如く三方に別れ馬を馳せて逃けるを巨蛇大に狂り河内守殿
 を目懸追來ると疾風の如くにて山谷震動なし岩砕け石飛で霞の降るに似たり殿と巨蛇との
 間近くありし故四人の者始め忍び居りし數多の家來も鉄砲持たる討ふて打となふねをあれ

よ〜と云ふばかり有漏つく中ふらや今河内守殿を一番と見わたる時一も松の蔭より一人の若者躍り出毒虫止まれと呼りける霹靂の落掛るが如く成まかばさしを猛威の巨蛇も吃と止まり振向いて怒る頭を高く揚煎湯の如くなる毒氣を吹懸たりけれども民次郎の機て老翁より授かりたる奇薬を含み居るなれ少も恐す同く老翁より授りたる手裏剣をとつて發矢を打てば其兩限中てさしもの巨蛇を途方を失なひ委蛇繰廻て苦む所を民次郎照さず飛掛て首際を一刀切付れと句かは以て溜へき首と胸と兩に成て死したりければ一同ドツ賞歎し暫時ハ鳴も止ざりなり河内守殿此体を御覽じて覺えず扇を揚仕たりくと稱美し玉ふ其中に四郎兵衛始め一家中の者何も御馬前に馳集り河内守殿の恙な兒を祀し其勇功を感賞しけれハ河内守殿否とよ仕留たるは彼若者など勿々人間業にあらす彼ハ如何なる者なるのついで家中にてハ見馴ざるなりと仰ければ四郎兵衛謹で頭を下げ彼者は私しの甥小し松平下總守殿の家來松井内藏の次男民次郎とて今年十六歳にござりませと申けるを河内守殿聞玉ひ其方は天晴願母敷物を持たるか何ハ兎もなれ城中ハ同道おし寛々禮を云ふへしと直に歸城に相成たり因も河内守殿と數年人畜を齒したる巨蛇を一擧に打取除に危難の

場を民次郎小救はれ給ひしかハ慨なること限なく直に御達有んとて民次郎を御居間へ召出され近うくと町樽に仰せられければ民次郎敷居際迄出て平伏なすを河内守殿重て我今日之の危難を免れしハ全く汝の働なりさすれば誠ハ命の親とも申すべし辭退ふ及はず近うくとの御意重ければ民次郎少々座を進えて平伏す河内守殿申されるは汝が今日の働死人間業とは思てれず誠以て古今稀なる天下の英傑ありして當國へ來りハ如何なる譯ぞ民次郎謹んで兄市兵衛が喧嘩の最初より江戸表にて横死せし趣き離討のため當所に到りし迄逐一に陳れば河内守殿仰けるは市兵衛の武勇ハ豫て聞居たるところあるが不慮ふ討れたるこそ残念なれ汝の心中察入る又我が危難に逢ふべきを知りたるハ如何ある故ぞと問れば民次郎四郎兵衛側より進み出瞳んで申しけるは昨夜天文にて君の御危難を前知いたし夫より斯々と昨夜の始末を述べれば河内守殿大いに驚き玉ひ扱ハ汝は若年なる故武勇一擧の者とのみ心得しに文道に透明達したるか天晴河内守が五萬石に替へても欲き豪傑かなと頼に感賞ありしかハ民次郎謹で不肖の某過分の御賞美を蒙り冥加に餘る仕合なりと平伏す河内守殿重て仰せるやう汝は容貌と云ひ氣品と云ひ先刻よりの話に依て見るに勿々凡人小あらず

誠文武の俊傑なり何にても教んことあらば必ず示し與ふ謹んで教を受べしと威儀を更だ
 恭しく云ひけるに予民次郎「ハット頭を下有難き仰を蒙るものかな尊き御身を以て私し
 風情の若輩を御叮嚀なる御取扱ひにて恩意を申上げよとの傍詞は恐ながら賢徳の御志と
 感服仕つれど去ながら愚昧未熟の者何とて御聽を汚す程のと有べきや此儀ハ徧に御免下さ
 るべしと云む河内守殿否とよ我も今年二十三歳なるが家柄なれば武道は未熟ながらも心懸
 て居るなれども治國の道に至ては甚闇く汝小對して額に泚する心地せり失政の麻もあらむ
 教へられよと仰られける予民次郎を茲小至りて辭し難にや恐ながら御意餘に重ければ聊
 か恩意を申し上ん凡う一國を治るふ其國民を信服さする小在る國民を信服さるには御
 家の尊重小あり御家を尊くして重々しからしめんには太祖の立玉ひし制度法令を堅く守て
 子孫違背せず歳月を重ねると長久なれば自然と尊み生じて重々しく國家繁榮なるに至らん之
 小反し己の私欲に任せ先祖の制度法令を變改すれば是を見て才智權勢たふ有べ雖もても國
 君と成得る者ありとの考へを生因すの端緒あり非謀を企る徒隨を接して出來り遂に國
 家覆亡するに至りしは和漢共に古今一轍なり又障り多き事ながら某しが恐れ奉る今日の

事なり假令御領地の妨げになれとて儘一ツの毒出あれも數多き御家臣の中へ退治方仰せ
 付られて然るべからん千金の子は欄に凭ずとも申すに非ずや若御前小置せられて萬一の事
 あらば萬人の御家中ハ勿論民百姓までも如何仕るべき必ず一匹夫の勇を御好みは然るべ
 からずと辨舌爽かに申し上げれば河内守殿座を下り玉ひ誠に其許ハ我師範なり只今の金言
 肝に銘じて忘す謹んで教を守らんと仰ければ民次郎驚き遙かふ座を下りて不肖の某がし恐多
 くも出遇たる事を申上げしに御答もあく御座を下らせられたる段冥加身に餘て有難き仕合
 に存じ奉ると平伏せりさて夫より最も叮嚀ある尊敬を請け種々の御馳走を下されて御暇を
 玉はりければ民次郎面目を施して下城せり後ふて河内守殿家臣の面々小向ひ仰せられける
 は賢者の言ハ簡にして要多しと聞けるが誠に民次郎が今日の一言肺腑に徹して覺えたりと
 其より萬事其心得ふて國政を脩めければ河内守殿一代ハ國民泰平ふて樂めどなん斯て民
 次郎は驪を狙ふ身の斯一ヶ所に月日を迷ひは不覺なりとて二三日過ぎると叔父四郎兵衛同
 伴にて登城なま出立の御殿を申上しるを河内守殿仰けるハ今其許小離るゝと賜を断が如く
 なれ其委細の應を聞らば是非小及ハ只此上ハ首尾能平座を慮るべしとて筑州在文字

の作にて二尺三寸ある御秘藏の名刀を賜ければ、隨で頂戴なし、愚に御腹乞して退出せり其後にて用人細川市郎右衛門御前に進み出民次郎儀如何程の英才なりとも未だ若輩の事なれど高祿を下し置れ隠して御留成るれば留り申さんやに覺ゆるなりと申し上げれば河内守殿阿々を笑はれ我輩彼の器量を考へ見るに中々我が臣下と爲すべき者にあらす若時を得て其才を伸せとあらと勇々敷天下の輔弼あらん見よ、譜代の士ながらも下總が如き者の臣として世を終る者ふあらず實ふ有難き素傑なりと御賞美ありしとあり扱も民次郎一人旅の事なれど何の支度もなく四郎兵衛夫婦へ、愚に腹乞して翌日早天に三春を立て奥羽の間を此所彼所と見巡、霜月の末に江戸へ着し要人小對面せし所要人は國元よりの知らせ有しにより陳て隠討の願を出し主君與平美作守殿の許を得て兄民次郎の來るを遅しと待居たりし折柄なれば大に悦び早々市中へ借宅なし密に隠丸郎兵衛の在所を捜し居たりしが、凶矢の如く早其年も空く暮れて隠れを慶安三年の春に成にたる

第四回

大賢は信に橋門を傾く
奸邪は遂に正に勝す

當時諸大名方ふて名ある浪人或ハ一藝に秀たる者あらば争ひて召抱へられたるしが中ふも紀州家頼宣卿は殊の外武藝を好ませ玉ひしかば不圖民次郎の噂を聞及られ我松井市兵衛を殊の外懇望せしかば眼病のために暗々討れ何程りか幾多ありしに幸あるかな民次郎ハ其弟なる由あれバ呼寄様子を見て市兵衛程の器量武術共に備はり奉公を望むバ召抱んとて旅宿を問届け、速く使者を以て申入れれば民次郎直に紀州家の御屋形に到り用人土肥治左衛門宅へ就き案内を請ければ治左衛門像て主君大納言殿より申付置れし事あれば直に御殿へ案内申さんとして民次郎を同道して御殿へ上りければ御茶菓子と下されて後大納言殿の御前へ召出され其方の兄市兵衛を召抱ゆべき旨約束いたせし所眼病のために高橋九郎兵衛とやらんに卑怯なる計ひにかゝり暗々討れし由曲ながら無念至極の事なりし其方の心底さこそと察を入ぬ去あがら既往ハ云て返らぬ事を是是非なし此上ハ其方を市兵衛同様と思ふにより時々來る様に、懇に仰せければ民次郎「ソト平伏なし亡兄市兵衛存生中ハ一方ならざる御厚恩を頂きし上は只今又存じ寄らざる御意を蒙る段何共御禮の中上べき様是も有難き仕合に存じ奉つるを申上より、願宣卿熱民次郎を御覽有るに丈ハ中人より低く

五尺二寸ばかりにて骨太く肉少く容貌は市兵衛より遙に劣れり然共限中重畳にて威風凛々を拂大納言殿も自然と恐れ敬ふ様に思召れば何様聞及し通尋常の者に非と感られ如何民次郎兄市兵衛の武藝に比れ汝の術如何と仰ければ民次郎徐に首を上恐れ有事ながら兄市兵衛と妙手と申に之有まじけれ其形の如く仕ると覺より勿々私し如き愚鈍の者よはあらずやと感得ぬと述けれと大納言罷莞爾と笑れ像て聞及ぶ謙遜の語へ去ことながと去年三春にて武勇をあらはしたる輝き承知致居に何とて深く隠すやと仰せければ民次郎兎角當世ハ少の譽れも仰山らしく評判するゆゑ御聞に入まならんが三春表の儀ハ秋田様の御武勇小之有と答ゆる小大納言殿然らば其方の申すこと武藝小てハ兄市兵衛を討るの高橋小敵をるハ覺東なき業なすやと問玉ふに民次郎仰せ御尤には存じ奉りるなれ共先にハ兄小比べて如何との御尋小付及び難しと申上しあれ共私しも武士の片割其道の武術少ハ必懸居るあれハ九郎兵衛が如き者如何程與力加勢有るとも見懸たらんにこやとか遣し申べきと詞涼しく答へければ大納言殿扱ふろと思召何様先程の心得なくてハ御尋にハ出られし然らば予が家來共と木刀の試合を致し見せしと仰せければ民次郎御言を返奉るハ恐

多き事ながら其儀は御免を蒙りたし我が師の教に凡そ劍術は正人を殺さず邪人を殺すべし名を賣るにあらす民を救へと然るに唯今御前にて試合致して私一負れば夫までの事なれ共愚慮の一得にて若し勝ときは其人戀るべし又負り餘るは詔うに當り君の思召諸士の前も恥しく存ゆるなりと申上けれハ頼宣卿重て道理の事なり就てハ愈其術を見まほしく思へて相手なき一人の術を所望するなりと再三の仰に民次郎黙止がたくて甚未熟なれども弓術を御覽に入奉らんと申すよ頼宣卿大に御喜悅有て夫こそ究竟のことなれと御近士に御差圖あれば白木の弓に矢を添て持出でたり其弓は湖六分小して矢と鏑あれば甚だ重し民次郎睡で之を受け御庭へ下より折しも二月下旬の頃なれば蹄雁一群鳴連て渡と来るを見第一の分を射留御覽に入れんと言ながら矢を交へ弓を満月の如く引絞リ「エー」と聲かけ切て放つに其矢過またす一番に飛行雁ふ中ると見へしが翼を折て庭上へ落下りぬ頼宣卿始め人々覺す聲を揚て響ける間ハ民次郎駭寄て兩羽取揚御近習へ渡ければ頼宣卿是へくと仰せられ御自身に取て傍覽有るに鏑が雁に中しと見えて頭微塵に碎け死したるに予扱々叩しよ勝る手術かな實ハ手練の程を試さんため故意弱弓に重矢をあてがはたるに其を掛合せ

飛雁を名乗て射落たる事誠に漢土の養由基我朝の那須與市本間孫四郎等の上にも出なん此
 一術ふて萬事思ひやうれたり古今無雙の豪傑あるを知るを御感甚しく夫より御膝元近く召
 て時に此頃都下に名高き由井正雪と云浪人あり面談せまやと御尋有ければ民次郎未而談致
 さすと申上ければ大納言殿然りと近日正雪を我屋形へ招くべければ其節面談致すべし渠も
 一時の豪傑なるかと仰せある小民次郎畏と奉つると御請して夫々夜小至る迄御前にて御物
 請申上種々賜物有て御暇下され旅宿へ帰りける斯て或日紀伊大納言殿正雪を召れし小早
 速參上しける也と頓て民次郎をも召れれば是亦急ぎ參上なし御次へ罷出たる小一人の男
 白布に黒糸を以て菊水の紋縫ひたるを着て一尺二三寸許の小刀を帯一色白く顔柔和なれ其
 殿重の威風有りて一方の大將とも成べき様に見えたるが座し居たり民次郎心中に是を聞及
 びたる由井正雪あるべしと思ひ彼男も折々民次郎を尻目に懸て居たりし中御近習來て兩入
 共に御前へ出べき由申にぞ兩人揃ひて御座の間へ出ければ大納言殿是へくと請じ玉ひ悉
 暖の無事を問はせし後如何正雪是ぞ豫て咄し置れたる當時の壯士松井民次郎あり知已
 になるべしとの仰せ小正雪莞爾と笑ひ民次郎に向ひ扱ひ承まわり及びたる松井氏あるか英

名は豫て承まわり一而の交り得度と思ひしに圖らずも今日君の御威光を以て對面を遂げ大
 庭之小過すと甚だ悦ばしき体あるに予民次郎を彼方小向ひ某御當地へ罷出てより足下
 の雷名を承まはり居りしが今日相逢ふ事を得て本懐の至りなりと互に謙退の禮畢り夫より
 四方八方の咄に成し時大納言殿正雪に向ひ天文地理神佛の道を尋ねさせらる、小其答詳ら
 かにして辨舌懸河の如く殊に今日は民次郎に聞せんと思ひん議論他日に勝れたと其より
 又民次郎に向はせられ彼是と尋ね玉ひしに民次郎謹んで若輩不束の某し何事も存じ奉ら
 ずと申上れば傍かす正雪も難問を仕掛れ共更に答へざれば一座甚だ不興の体に見えたり
 しが頓て未の刻にも成りし頃民次郎御次に下り急小不快小罷成まゆる御暇を賜り度と御近
 習に斷り僂兒早々旅宿へ歸りたり跡ふて大納言殿正雪に向はせられ渠の某方に懸したるに
 や今日の様子甚だ不骨小覺ぬと仰られしに正雪微笑渠の容顔勿々某なきに懸する者に非ず
 只今の舉動何共合點仕つりかたし誠の不快には非ずして心中小何か大望有て話久しきに
 至る此正雪に推量せられんと思ひしにや併若輩の身に於て然ふとも有まどければ誠の不
 快も小計り難しと執成て夫より又文武の話に夜を深せしが御暇を玉ひて正雪歸宅なり

たる小折節手足と頼みたる加藤市右衛門熊谷三郎兵衛吉田初右衛門金井半兵衛等來會して正雪の歸を待居たりまかハ正雪これを一問へ招いて我今日紀州家へて松井民次郎と云ふ若者に出會たり是迄門閥の前へ出たるも終に恐をなしたる事なきに彼が偏に座するは大山の麓に居る心地して何となく頻に夏蠅く覺ゆたり天晴の豪傑とは渠なるべし去迎我と志を同する者小非を如何せんと太吐息して語りければ四人の者其口を揃へ左様なる奴は闇打に爲るに如のなるまに何なる英傑なり共我等四人申合せ討んふハ容易かるべしと言ければ正雪笑つて闇打又出來る程の者なりと相談に及ばず如何にも成べきなれ共渠の太刀業勿々御邊等が百人懸るとも叫ぶべき小非又此儘活し置て我々の妨となる奴なれば随分此方より惡ひ寄りて間能ハ毒を盛て殺せよ外なしと云ければ四人の者共先生の遠慮極せり迎夫より内々姦計を巧し事後小ぞ思ひ知られける翌日民次郎御禮のために紀州家の御屋形へ參上なしけるに大納言殿直に召寄給ひ(病疾)の御尋なき有て後に民次郎ハ少座を退ゆ恐れながら御願ひ有は懼り多けれども御人拂ひ下されしと申上げれば元來大量の明君小在せよ少も疑ひ玉はず御近習を御退遊さるゝ小民次郎御膝元へ這より私し儀兄弟共

に御高恩を蒙り奉つれば御機嫌の程をも願みず若輩の身を以て申上る仔細は昨日御屋形に於て初て對面仕つりたる由井正雪の議論を承るに誠に世の常ならぬ英雄と覺るなり然ながら眼白み勝にして目の下に横文あり是自然ハ反逆企むるの相と察より加之其辨舌ハ蘇張にも恥ぢざるべし渠が才智人の容貌と辨舌とを以て反逆を發さざれば虎に翼を添へたるが如し住々の天下の大事を引起さん計り難し斯る者と入魂に致せば無益と心得昨日は法外の中座仕り御怒の程も忍入奉るなり渠を御近づけ遊ばれては御家の御爲に宜しかるまじきや小覺え候某好んで天文を伺ひ觀る小都下に十萬人の人死すべき殺氣あらはる是何事に有べきやを測れず斯申上なば才を妬み讒を構ふる様小思召るゝの理も多妄に口外仕らざる心底なりしも只君も之に申上奉るあり能々御賢慮を廻らさせられたしと言上なまれば大納言殿感動まじし何様據所なき小もあらす予辭ふ能思べしと有ければ民次郎平伏して慮外の御答もなく早速御聞入有て御懇の仰を蒙ること有難ければ御禮申上て退出なしたり翌慶安四年の秋に至り果て由井正雪等の逆謀露顯して誅罰せられしかば大納言殿愈々民次郎が先見の達明なる小感服せられしとあり却て由井正雪も如何にもして民次郎小

近寄り姦計を以てなき者にせんと思ゆより五六日を經て民次郎の旅宿へ見舞として來り終
 日物語なして歸りしが又七八日過て見舞とて來り種々談話の末に御手開あつた必す拙宅
 へも御越下さる様にと懇切に云て歸りたり民次郎思ふ様我正雲と人魂ふすべからざる者と
 察して遠れたるに渠より度々尋ね呉る上は返禮も行ざるに無敵なり明日行て見やと思ひ
 立其夜臥床に入て眠らんとするに忽民次郎々々と呼聲あるに不思議なる事哉と起上りて傍
 を見れば去年奥州の山中にて逢たる異人が燈火の下に立たり民次郎大いに怪し何故有て老
 翁の此處に來玉ひしやと問ければ老翁悄然として汝明日一厄難に逢ふ可れども恐怖せずし
 て行ふ利あり且前年與へし藥を服すれば身を損ずる憂なし唯謹で酒を呑なかれと云ひ捨て
 飄然と去よと思へば是一睡の夢ありしかば民次郎も奇怪の事なりけりと念ふ心決して翌
 日正雪方へ見舞たりし折節在宿にて早速座敷へ通し正雪出向ひて一通の挨拶畢り種々物
 語をなせし中時刻になりければ正雪が稀ある御來駕あるゆゑ何ぞ御馳走申度存ずれども無
 人と云ひ俄のみと故其意に任せず取ながら出茶合の籠菜にて夕飯を進またき問答々召食り
 て下さるべしと云ふ民次郎昨夜の夢の次第もされれば扱ころと思ひながら何心なき体にて

て千萬添と答へて扱へる中膳を持出しが膳具の結構料理の様子等諸侯方と云共
 既上あるまじと思ふ許りなり其時正雪更て餘り危相なれ共只御心安記を馳走と思されて
 召さるべし兎角申すも却て隔意がましければ拙者の勝手の方へ参るべしとて奥の座敷へ入
 りり民次郎の少も疑ふ氣色を見せず心よげし食し尽しければ給仕の者と悦べる有様にて
 中酒を進めけるに下戸ありとて一向飲まざれば勝手より廓然と云る醫師立出來りて頻に酒
 を又進めれば民次郎再三下戸と云て辭すを廓然猶強るを以て民次郎盃を取て廓然が前に直
 一某しは下戸ゆる御断申を左様無理強一玉ふるかと先貨殿の御手際から見請上にて一
 つ御相手仕らんと少く面色を變て云ひける故廓然確と行つたり當惑せる体を敏も見て
 正雪勝手より立出又例の廓然が無理強を始めたるか飲らぬ酒に何とて銚子を引ざるぞ早々
 御湯を進らすべしと云を機小廓然勝手に逃行ぬ續て湯を持出ければ正雪試みて後民次郎
 へ進め膳も既に引たる後暫く談話なまて別り跡にて正雪廓然向ひはや膳部の毒にて
 も十分死すべきを餘り強て色を悟られんと仕るころ淺慮あれ民次郎歸宅の後は必ず死す
 べしと一日二日待られ共何の妙法もなき故その様子を探らせるに民次郎更に變りたる様な



たみぢるふきり
民次郎紀伊候
の御前にて
飛雁を射る



く達者ありければ正雪大少掬れ扱々渠は凡夫にてハ有まじ兎ても角ても我等の邪魔を爲ベ
 き奴あり去迎狼の手下なさバ大破の基となるべし彼が昨夜の様子にては確に我等の巧計を
 悟しに相違なし此上は寧ろ毒の妬と唱へて欺き果んと思案を極め其後日を経て民次郎方へ
 到り先日の無禮を謝けれバ民次郎ハ厚く禮を述べたり時に正雪座を進発某し既に弓矢神に見
 放され臆病 赤練の志出来れり其譯ハ先頃紀州家の御屋形にて貴殿と出會せし時覺えず足
 下の勇威ふ恐れ進も及び難死を計り口惜く存じ所詮足下を亡者に爲されば我一人天下無雙
 との呼れ難しと思ひ身法にも毒殺せんと巧みまに足下敏くも悟り酒を用ひ玉ハざるゆゑ我
 が巧計相違して足下ハ無事小歸り玉へり後熟思ふに淺智を以て君子を謀んと企てしこと
 不覺の最上されいで此上ハ自殺して身ハ辨解なさんと存立しが同前非を悔るなら足下に委
 細を語り賢者の手にて死しな心願の百分一をも消せんかとは是迄參上いたしたり憐れ願
 の御手に掛られ 償を散し玉へ我が本望此上有べからずと聞も涼しく申まければ民次郎心
 中小扱々凄じき奴かな我眼力誤たず大儲を企る者なりしかと思ひけれ共さら色に顯さ
 ず仰せ承まのりて歸入ぬ當時天下無雙の正雪殿に 歸にもせよ嫉る、あうとハ若輩の某し

取て本懐至極此上なし某し如きを畏る者と思ひ玉ひまは千慮の一失御目違ひ成べし然
 計の事を思し立玉ひあがら早速思ひ返したりとて故意御出下を包す物語りし玉ふハ誠に
 英雄の所業なり過て改むれば過に非そとハ先生の事あり誠ニ感服仕ると打解たる挨拶小正
 雪も満足して私宅へころは歸りけれ其後民次郎紀州家に參上せし初此始結を申上しかバ大
 納言殿御聞有て扱々汝ハ運強き者かな其小反して正雪こそ心得ぬとて是より正雪を疑ひ御
 信仰段々薄くなりしとぞ

第五回

沙粟の身覆天の譽を負
 豪傑の心裡妖怪なし

更説紀伊大納言殿ハ深く松井民次郎の英才武勇なるを感じ給ひ或日御登城の折殿中ふて太
 戸宰相會津少將殿の御兩所へ此御話ありしかば當時天下の賢才を求め吐哺握髮して之を待
 見幼主を補佐なし治を圖るの大任を負たまひし會津少將殿今紀州大納言殿の御話を聞き宛
 然夏康の傳説を夢みし如く痛御喜悅あつせられ御下城あるや否用人日向源右衛門を召て仰
 られけると今日殿中ふ於て紀州家より示せしるに松井民次郎を云ふ者英才賢徳あるは人の

由其方只今より直ふ参て而談を得たき旨申し傳ふべしと仰すれば源右衛門退まりて急ぎ民次郎の旅宿へ罷越けるに折節留守にて弟要人居合ければ使者の趣き申し傳て立歸ぬ斯て民次郎夜に入て歸宅し會津家より使者の参りし委細を聞き兼て賈徳の懇ある會津少將殿の事あれば天下の大事を談するには良便宜ありと悦び翌朝會津家の邸へ参上ま日向の宅へ到りしに源右衛門出迎ひ初對面の禮終て後主君少將殿登城中あれ共晝後には歸館致されん御退屈ながら御待下さるべしとて茶菓子など出して厚く待遇居たるに暫有て少將殿御歸館の沙汰有と齊く使ひ來り民次郎同道にて早々出へき山仰せ越れば源右衛門は民次郎を誘ひて御殿へ参けるふ少將殿の御下城ありし支度の際にて御次の間に待受られ今源右衛門の案内に連罷出る民次郎を見て是へくと指き玉ひ松井民次郎とは御邊よる早速入來の段過分至極なり先此方へと先立せられ居間へ入給ひければ民次郎殿居を隔て、平伏あしたる少將殿再立せられ夫までは君臣の禮なり賈殿も我も共に天か下に住身何か苦かるべき迎無理小手を執て一間へ入れ給ひ定例の挨拶済みてのち正之卿膝を進られ御邊は文武の禮儀と問及びしひえ夙に面談を得たく思ひたるも今日幸ひ逢とを得て甚悦べりとて弓馬勦

錦の事を問ひ給ひしふ民次郎一向御請申し上す黙して有りければ少將殿再び膝を進みれ予不肖なれ共一城の主たり然に賈殿予の問に答へざるに定て問の趣きを失ふたるあらんか願くは過ちを問て改めんと仰られけるに余の勿体なきに民次郎全身に冷汗の出る思ひして平伏なし恐ながら君の國家の柱石補相の任に在ませば定て治國平天下の御問も是るべきかと存し奉り一所豈圖んや一己の術を御尋遊させられし付私身不肖なる故と存じ恐入奉ると御答へ申し上げれば少將殿賈にもと感ト玉ひ頗ふ膝を進られ予愚蒙の身ながら國家政平の策に日夜心を盡すと雖ども生得無學不才なるがゆゑに素餐の恥を負へり然るに今日賈殿に逢ひ年來の愚蒙を聞かん事の悦ばしき賈殿予と談するに足すとせずして何事も思はず正論を述べられよ 隨で聽んと仰られれば民次郎恐れ入りて私語是迄多の諸侯方の御眷顧を蒙りしか共未だ君の如き御問を蒙りしはあり私し不肖の小人なれども今日迄學び得たりし程の悉く申し上ぐべし若御用立べき筋あらば御取用の下されし先當天下の神祖の賈の聖慮を以治させ給ひたる御代ふして千秋萬歲御繁榮の基ひ裂る所なき御掟あれば何侍迄も其まゝに差置せられれば御治世長久の根本と思考せらるゝあり然ながら亂世治世の

差別ありて亂世より治世に移る時、民の耳目を一新し、人心を靜實にするの政事あり御當代
 と正に其時に當れり今に於て太平の飾を盡し給へ補相の任にして君の御職と存し奉れりと
 御答申し上げれば少將殿開玉ひて是賢徳の業にして予の及らざる所なり然共若己を得ずし
 て行ん時は其策何に出べきや民次郎答て不束ある私の考ふ今の時勢小方り政事に
 害有て除くべきハ諸侯の國替なり抑此國替ハ戰亂始て定り天下統一統の時、當り數百年
 來割據して民人を撫育懷安なし其人心を得たるより勢威盛に至り其制し難き諸侯小御加増
 有て新地に移し其上下を新に破くあして以て跋扈の憂を絶つは容易に制するを得るの策に
 して當時に有てハ利あるも方今泰平の久き御代ハ甚だ害あり其譯ハ國替所替を仰せ付
 られる者只今ハ有ては大方御譜代の諸侯に御加恩有附ての所替なるも是目出度規模小と
 あるもれ共日本の土地限りに有ることなれば往々ハ不道理の國替も出來致す小恐らんか且又
 國替所替あれば必ず諸侯ハ貧乏とするの憂ひ生せんか上貧小して財用足らざるに至ら
 ば國政暴虐ハ相成下々の難儀を醸すべけれ是害の一ツあり又民百姓ら其領主の度々代
 るを見れば夫ハ價れて領守を容人の儀小考へ實ハ主君と仰すして自然に是を輕んずるの恐

生すべし是害の二あり御代長久の中には奸曲の執政出て政事に與り己に附ふ諸侯役人を好
 地ハ國替させ役徳多き勤み役替させなきして私をなせば罪なくして惡き國所へ移され役替
 されたる諸侯役人は恨を含み將軍家を頼むと思ふ小至らんが左様ある時ハ恐なが御威光
 輝く相成べきか又若時節有て己權柄を握らば往昔の執政たりし諸侯を惡き地へ移さ私の怨
 を報せんと思ふが爲メ國家の大事を忘れ疎漏小爲るに及ばんか時の執政たる者互に右様の
 始末に相成る天下忽大亂とあるん是害の三あり國所替は新機ハ害多きものなれば容易なら
 ざる事あるも堅く禁制なざる、が當時の急務かと存し奉つると辨舌水の流る、如くに述
 べれば少將殿頻に御威歎遊され重て仰々れけるハ當代に於て爲べき政事とハ如何なる策を
 ぞやと問たまへん民次郎答て今天下泰平聖徳上に在して武威盛ん小行ハれ執政の大臣皆賢
 直平和を旨となし忠義を守り萬事儉約小して驕奢なく賢を忌能を思むの私心なければ能く
 諫を容上諸侯より下平士に至る迄驕奢ざるが故に皆富實な故に農工商能上を敬ひ上又下
 を惠と憐むを以て四海泰平なり然共此後世移り人代り太平年久れ小至ハ人々自然と驕奢
 強く諸侯は今の將軍家の如く家老は諸侯の如く遊次小驕奢くあるハ自然の勢ひにて古人の

教の如く人辛苦に生長されバ才智を生じ驕奢小育ば不智不才なるの理にて世の治れる小
 従ひ諸侯門閥方のと暗愚となりて驕奢に流れ遂に貧困せん貧困すれば必ず富家の金銀
 を借るに至らん富家の金銀を借る小至らハ武威漸く衰へ富家の人日々に勢力を得べ一萬物
 の利權商家の手に落ちた士大夫諸侯とも富家の鼻息を伺ひ遊逸に流れ女色に耽るや必然
 若さざる時は忠義廉恥の心滅て町人の心と同一になり天下土崩瓦解の姿と成るべし私
 し愚考ふる小御當代ハ天下既小一統して素水あるも未だ驕奢に流れざるの境なり此時小
 於て宜く後の禍を防ぐの徳を施さざるべからず其徳徳を人心を清直にし威儀を正嚴さ
 らしむると禮樂あり今の御代に當て禮樂を興し王はずんば再び創制の期なけん今漢土周の
 禮を根本として和漢の古禮を參酌し時宜を計て禮を創め樂を興ハ御代は數百年の後も治ま
 行べし今是を創定し給はず在再して行て國はなほ治るべハれ其失敗多かるべからんと述
 れハ少將殿重て何故今代におらざれば創定をまを得まじきやと仰られるを民次郎答て漢土
 三代の後漢の高祖天下を統一子の惠帝を経て孝文帝の時小至り禮樂を制作すべき時節
 ありとて賈誼の如き賢者論せしか此文帝臨遜して制作す玉ハ武成の世に及びて禮樂を創

作せんと爲したりしも天下既に在再の政事に習ひて制作する事能すなれり今代の勢い殆ん
 ど孝文帝の代に齊く又當時將軍家は文帝の徳に劣らせられず賢藩多く文武の列相補佐なせ
 り此時に當り何の疑ひ憚り有べきや制作の儀なきは大闕典のまゝ後の識者必ず惜んぞ
 述ければ少將殿頻に點頭せ玉ハ貴殿の議論を聞心豁然として始めて醉の醒めたるが如
 き誠に吾師あり予教示を受けて他日聖主を補佐なま諸老臣と謀て大制作するに至らざる足
 下を勞をべし其時辭讓あるべうとすと仰せられければ民次郎謹んで御意有難く候なれ共制
 作ハ大義なり私ハ如き凡庸の分に非ず必ず天下の大賢人を撰で計議なし玉ふべし然ある時
 は私ハ如きも君に咫尺して千慮の一得とも成事あるべしと夫より平天下治國の道古今成敗
 の理を論ずるに明瞭確實辨舌水の流る、が如し其中既に貴昏ふ及ければ少將殿始て心附
 れ近習を召れ夕膳ハ出來たやと仰せければ近習の者答て先刻より三度迄伺ひしか共何の
 御意もなかりし故差控へ申せしかりと云を聞て少將殿笑せ給ひ貴殿の議論肝膽に徹一登
 えす空腹に成り一を忘れたりとて夫より民次郎と御同席にて御膳を召し終り又々種々の御
 尋有て夜盡く更ぬる頃御暇下され民次郎と旅宿へを歸りける斯て會津少將正之卿ハ民次郎

の説を聞かれ斯る賢人を得たるは天下の洪福にして泰平萬歳の基なりと其夜は眠られぬ迄に
 悦び玉ひ此事を誰か相談なさばやと考られしふ當時武功を以て名を顯一家を立られたる人
 々月なれば容易に咄ま難ま唯水戸中納言光國卿の御年若なれ共文武の心懸淺かす因て此
 御方に談せむやと思され翌日御殿より退出がけ直に水戸殿の屋形へ御見舞ながら御越有て
 昨日の始末を委細御咄有りければ光國卿大いに悦び玉ひ扱々古今稀ある賢人かな何卒面談
 を遂げたしとして翌日光國卿會津殿の屋形へ參られ民次郎を召して又々治國平天下の道を御
 尋有けるふ其答に駭にして辨舌爽快なりしかば甚御感歎有て是より民次郎の會津水戸の兩
 御屋形へ度々參上まで禮樂創定の事を討議し有ける所世に塞翁の馬の如く儘ならぬは浮世
 みて翌慶安四年四月廿日三代將軍家光卿薨去在られければ民次郎大に歎息なし天なり命
 也人力を以如何共すべし様なしと覺悟し或日會津殿の屋方へ參上して申上げる様像で御計
 儀申上し禮樂創定の大事も御幼君の御世に當ては勿々行るべからず只時節を御待なされ
 先其迄の只今の趣きにて治めさせ給ふとも御代は益長入なるべし就ての私儀毎度申し
 上し通り況の敵必定期御警地に隱居んと思ふと雖も國忌の内に警討仕つらんハ忍有と來年四

月迄諸國を廻り營の住居を確と尋ね置度存ずれを暫時の間御暇下し置れたまふと云ひければ
 少將殿殊の外名殘惜く思召せられけるが難を討さんと爲る身なれを強顔し留むる譯にも
 かざるゆゑ少將殿仰せざる様假令何地も有も若天下に變事發らば速かに馳歸るべしとて旅用
 の金子を下さされて御暇賜りければ民次郎謹んで頂戴に及び退出るし夫より水戸紀州の御
 兩家へも參上して御暇を乞弟要人をば江戸に留め置き己一人慶安四年五月上旬江戸を
 發足して東海道より日本の宗廟をればとて伊勢兩宮に參詣なし伊賀を経て五畿内を廻り
 大坂に到り前年兄市兵衛の便寄し播磨屋七兵衛方に逗留して彼方此方日々歩行廻れ共是
 ごと云手懸無れと大坂の探ぎくハ七兵衛に頼み置き四國より九州に渡り津々浦々迄も落な
 く廻り遂に豊前小倉より長門へ渡り道を北に取りて山陰道へ掛り伯耆國の溜と云所の山中
 にて計らず日を忍しなる故或家に入て宿を頼み去に心長泊けるにぞ民次郎悦び心打解て圍
 籠裡の傍に寄茶など呑下り四方八方の咄をせしに此處を十町計山奥に在蓮光院と云ふ大寺
 ふ何時の程よりか怪物棲て住僧と皆殺され其後近郷遠國の名僧智識道徳無雙悟道隨一の御
 出家達を圍みて一宿させたるに皆血を吸取られ于大根の傍にありて死せりと語られ民次

郎駕と其様子を聞き名僧智識の行者も忍ざる物なれど決して怪し物にあらず必定無智の
 鳥獸ならん我今夜其物を見届て後々の憂を除べし其寺へ案内すべしと云ければ皆々口
 を揃へて御侍の事なれと覺え有ての仰せならんが中々一通の怪物にあらず御無用よなざる
 べしと云ければ其民次郎いつかな聞入す我諸國を修業のために經歷ハさやうある物を退治し
 て人の難儀を救んどの大願あれと是非々々案内致すべしとて二三人の者も松明を燈させ十
 町許山奥へ行けるに樹木森々と生茂りて闇き事限なし案内の者遂に彼方を指し那が即選
 光院なりとて松明を民次郎に渡し足早に跡をも見ずして逃歸りぬ民次郎は一人松明を振な
 がら進寄て能々見は門傾き瓦落軒崩れて草達々と生茂り如何にも物凄き景況あり然共大膽
 不敵の民次郎おれは少も恐る色なく堂に上りて一間を打拂らひ悠々と休み入りしが遅々夜
 ハ深更に及びし頃頻に寒氣おこりて甚しく百千の扇を以て煽がる、心地してければ民次
 郎目を開き能々見ふ何やら上より覆ひ懸る様子あるゆゑ汝曲者ごさんなれと寐あがら扱
 打に切り拂ひたりければと音まて落たる者ありを其後は寂漠として更に音もな
 ！民次郎扱は一刀小打取たたまあらんと安堵きて休まんとするに又寒事前に同くして五体

凍る様に覺えければ又出たるかと言ながら再扱打小切付たる小手隠してずでんごうと落た
 るものあり民次郎心の中にて是必定鳥類の年を経たる小や在しならん前後二ツが雌雄な
 らば最早何事も有まざと夫より高射して一睡に及びけり程なく夜も明けぬれと宿の亭主其外
 四五人の者共が痛や夕の御侍も是迄の高僧法印の如く成れたであらふ若氣の至とて貴重命
 を空くせられし事よと叫びあがら来て見と民次郎ハ未だ高射きて臥居るに人々驚き揺
 覺しければ民次郎漸起直て夜前の様子を話したる小皆々手を拍て其勇氣を感じ譽稱へ順
 て其處らを見ね見るふ黒白斑なる蝙蝠の年経て野姿となりし物切られて片隅に死し居た
 りしかは餘の事に一同顔見合せ惘れ居ししが是ハ如何にも珍とて皆立のり引張見るに
 翅の先より翅の先までにて七尺餘の長なり又一疋の方ハ九尺ばかり有りて一入面も嚴く實に
 前代未聞の大野象なるよぞ皆大に悦び數年人を惱せし化者を安ん退治おし下れ寺も再興を
 るとを得るハ偏小御武家様の御庇蔭なりとて夫より種々馳走なしたりけるとぞ斯て民次郎
 ハ伯耆より道を轉じて山陽道へ志備前の岡山に至し頃は早九月の上旬へ一々彼由井正雪丸
 橋等が逆縁顯ふし同類の者共悉く公儀へ召捕れし時取々なりければ民次郎大いに驚き即

剗岡山の城下を發足なし無類の早足を以て行程百五十里を二日にて江戸へ着し先會津殿の御屋形へ參上し岡山表にて大變の噂を聞き只今歸府仕たりと申上ければ少將殿點頭像ての約束違はず遠路の所早速馳歸し予が喜び之に過を貴殿を見て泰山に座するの思ひをな

第六回

障壁溝壑願に足す
精義の両雄素願を遂ぐ

然諾を重じて契約を履み去もの日疎と云の衆情に支配せらるゝ凡俗の能るし得所にあらず松井民次郎は一旦の約旨を金玉視して百五十行程を馳歸り會津水戸紀州の御家へ參上し御機嫌を伺ひ此度の變にて馳せ歸れる趣を申上しるの何も悉く御満足ふて人心鎮り世情定る迄に都下に留り呉る様にとの御懇請なりければ民次郎に有難ことと思ひ暫く旅行を見合て居る中慶安四年も過て明れと五年の春と成ぬれば彼由井正雪九橋忠彌等が逆謀に加黨の者共悉く御召捕の上にて御處刑になり世間の物情も忽斂靜に歸きて再び泰平を樂むの瑞象に歸りければ松井兄弟も最早當所に留るの要あらざれば來四月國忌の明るを待て懸

高橋を尋ねのため發足なさんと支度して在ける所に天精義を照覽まじしして両雄の衷心を伺し賜しにや大坂表播磨屋七兵衛より繁の在所委細ふ知れば早々御上坂下されたしとの飛脚到來しとるにより松井兄弟躍り上て悦び勇直に發足の準備なし民次郎は御暇乞申し上んとて會津家へ參上ありて殊に御目見を願ひ私し儀儀々申上げ僞し九郎兵衛事當時大坂表に潜居る由しらせの飛脚到來仕まに付奈五月二日弟要人召連罷登り度あいた先達て御願ひ申上げ一離討の首尾宜敷御取計の程偏願ひ奉るを述べれば少將殿點頭れ如何にも其儀の承知致居れば努々氣遣有べからず松平豆州へも兼て談置たり殊に大坂表なれば御城代へを申遣し僞べき間安堵致を様にと仰られたるに民次郎感涙を流し初て御目見仕としより御高恩を蒙り今又莫大の御懇命を蒙りし段何時の世ふか御報應申し上べきとて御暇を給はりて退出に及び夫より民次郎は紀州水戸の御兩家を初め御懇意を蒙りし諸家へ一々御暇乞申上て旅宿へ歸りけり話頭殿高橋九郎兵衛の兄の隠松井市兵衛を討て其場より逃が如く宿所へ歸り支度もそこゝにして家來難田半兵衛谷澤雲入矢束繁右衛門の三人并江戸へて聯合たる俠客五人を召連大坂へ登り暫く旅宿に逗留して借み居まが懸かるに山形

剗岡山の城下を發足なし無類の早足を以て行程百五十里を二日にて江戸へ着し先會津殿の御屋形へ參上し岡山表にて大變の噂を聞き只今歸府仕たりと申上ければ少將殿點頭像ての約束違はず遠路の所早速馳歸し手が喜び之に過貴殿を見て泰山に座するの思ひをな

障壁薄敷願に足す 精義の両雄素願を遂ぐ

第六回

然諾を重じて契約を履み去もの日疎と云の衆情に支配せらるゝ凡俗の能るし得所にあらず松井民次郎は一旦の約言を金玉視して百五十行程を馳歸り會津水戸紀州の御家へ參上あし御機嫌を伺ひ此度の變にて馳せ歸れる趣を申上しるの何も悉く御満足ふて人心鎮り世情定る迄に都下に留り呉る様にとの御懇請なりければ民次郎の有難ことに思ひ暫く旅行を見合て居る中慶安四年も過て明れと五年の春と成ぬれば彼由井正雪丸橋忠彌等が逆謀に加黨の者共悉く御召捕の上にて御處刑になり世間の物情も忽鎮靜に歸きて再び泰平を樂むの瑞象に歸りければ松井兄弟最早當所に留るの要あらざれば來四月國恩の明るを待て

高橋を尋ねのため發足なさんと支度して在ける所に天精義を照覽せしめて両雄の衷心を御賜しにや大坂表播磨屋七兵衛方より繁の在所委細知たれば早々御上坂下されたしとの飛脚到來しるにより松井兄弟躍り上て悦び勇直に發足の準備なし民次郎は御暇乞申し上とて會津家へ參上ありて殊に御目見を願ひ私し儀像々申上げ候し離九郎兵衛事當時大坂表に潜居る由しらせの飛脚到來仕まに付來五月二日弟要人召遣能登り度あいた先達て御願ひ申上げ離討の首尾宜敷御取計の程偏願ひ奉ると述べれば少將殿點頭れ如何にも其儀の承知致居れば努々氣遣有べからず松平豆州へも兼て談置たり殊に大坂表なれば御城代へを申遣し置べき間安堵致を様にと仰られたるに民次郎感涙を流し初て御目見仕としより御高恩を蒙り今又莫大の御懇命を蒙りし段何時の世か御報應申し上べきとて御暇を給ひりて退出に及ひ夫より民次郎は紀州水戸の御兩家を初め御懇意を蒙りし諸家へ一々御暇乞申上て旅宿へ歸けり話四股高橋九郎兵衛の兄の離松井市兵衛を討て其場より遊が如く宿所小歸り支度もそこゝにして家來離田半兵衛谷澤雲入矢束繁右衛門の三人并江戸小て語合たる俠客五人を召連大坂へ登り暫旅宿に逗留して潜み居るが際あるに山形

四十七

表の松井民次は市兵衛の弟民次郎めれ共集は遺物をのみ好て武術はしらず三男五人は赤
幼少にて與平家へ小性に上て居る位なれを格別氣遣にも當らずと油断して貯金有と、はなを
事もなくぶすくと暮けるが翌慶安四年の春頃より松井民次郎と云者力置武藝古今稀にし
て諸大名の賞 餉 斜ならずとの江戸表の評判を聞九郎兵衛大少驚き市兵衛が武術でぎへ健
庸なる時ハ多勢にても覺束なき小今左様なる剛者を敵に持ハ夜目を合ぬ仕合なりと慌忙出
し固内福にして飽迄金銀を所持たりければ俄に大坂に地面を買求め表ハ皆貸店に構造
置裏にハ廣く深き堀を捲へ堅固なる門増を構へ十日視は町人の無業を見せ掛其上當時大坂
にて名高き俠客夢の市兵衛と云者を語合家來同然ふなし置き其他市兵衛が子分の中剛力な
る者十人と都合二十人餘になりければ先是如何なる剛敵たり共左程恐るに足らずと安格
しが猶も武藝小達せし者有と語合ハんと心懸て居りし所伊賀の上野の住人にて柳井兵
馬と云る武選一偏の浪士市中に徘徊困窮して居る由を聞ければ九郎兵衛天の助と悦び早速
尋て萬一のとあらハ助太刀して吳よと懇請なしけるに快く承諾しかる九郎兵衛悉く悦び其
日より己か隠家へ連來り最町噂に懸懸大礮石座したる思ひとなり日夜酒色に耽りて暮し

五十七

れるこそ實に深慮なれ話原松井兄弟と際て定めし日限の五月二日となりしかば主従四人
打建立江戸を發足しけるが三人の者ハ逆も民次郎の早足に續くことなり難けれハ尋常の急
ぎ旅よて東海道より登りけるに日數積て五月十日に大坂へ到着し中の島なる掃磨屋七兵衛
方へ便寄りしに七兵衛方にも報知の飛脚を江戸表へ差立てより指傳數て待居たる折柄なれ
ハ夫婦ひとまぐ大いに悦び先づ此方へと請じ種々懸懸今迄に探り得し九郎兵衛の様子など
咄し兎も角も御本望を遂させられる迄緩々御逗留なさるべしと殘方なく慰免しかば松井主
従も深く七兵衛夫婦の信實ある扱ひに感じ心置なく茲に落着翌日よと要人二人の家來を連
れ所々方々の神社佛團を巡廻し驛九郎兵衛の様子人々の取沙汰を探りしに近頃柳井兵馬と
云剛力無雙の剛術者を語合ひ只今ふては各一術に勝れし強者二十人餘常に會合して要領嚴
重ありとの事なれば要人筋も驚きたれども兄民次郎と云大山を控へ居れば何程の事か有べ
きと思直し宿所へ歸りて兄民次郎小聞得しよとを語れば民次郎驚と聞て暫く考へ居たり
しが砦と思案を定め要人に云けるやう噂の趣にては迎を尋常に名乗て時日場所を定めてハ
勝負をなすまじ何れ此方より押掛行ねばならず若左ある時は是非共集が居付の模様を詳く

探らざるに於てハ失敗を取の基なり因て今夜我忍び行て篤と様子を伺ひ來りての上にて此方より押掛行て討取るべしと逃けれバ要人年來の本望を果すハ悦ひ之に過す然共今宵只一人にて忍び行き給ふと甚だ覺束おし願て御供仕たしと云れば民次郎聞て其心配ハ道理あれ共我昔異人に授かりし忍の術を以て窺ふにより何の造作もなき業なれば必ずく氣遣有べからずとて支度をなし子の中刻過に宿を出高橋の隠家指て到り表の助家の屋根へ飄然と飛乗り裏の方へ飛下て見れば堅固に構へたる長屋門あり家の周回にハ堀を穿廻して誠に堅固なる構なり民次郎之を見て莞爾と笑ひ如何は用心なき共此民次郎を敵に受てハ既や還る、事能ハざるかと獨言して堀の手前より長屋の家根へ飛鳥の如くハ飛上り内へ這入て隅々迄心靜に案内を見定めて後家の内に忍び入りけれとも雖とて知る者なきも理り宵小酒宴在りしと見て或ハ酔潰て倒れ或ハ轆子を抱て高臥をるあり實に杯盤狼籍の有様なりけれバ民次郎笑を含み扱々敵持身には不覺至極なる体容かると思つ、大膽にも問毎々々の結構を充分に見辨し其處を立出て元來し如く屋根堀等を飛越て宿へ歸りしを要人主従ハ兄の爲す事あれハ氣遣有まじとと思ひながらも然とて虎穴に入りたるなれば一刻千秋の思にて

梁し居たる所ゆゑ大いハ悦び如何にくと問れば民次郎徐かに有し次第を委細に語り筆を執て繪圖を認め一々案内を示したる上廿日ハ國忌の當日なれば廿一日の曉ハ押掛て討取るべし要人ハ當の難なれば九郎兵衛を討取新五右衛門時助ハ高橋か三人の家來共を討取れよ殘る者は何百人有共我一人ハ任置て氣遣ひ爲べからずと謀合せ夫々に用意をなし一時千秋の思ふて其日遅まど待居たり愈當日に成ぬれば要人當年十七歳父内藏に似て丈五尺八寸有けるが肌ハ若込を着し上には白き帷子を着白鉢巻を二尺五寸相州廣次の刀ハ一尺八寸洛陽國廣の脇差を差たり二人の家來も同く若込鉢巻をし心覺の腰の物を帶して立出るに民次郎は平常の体にて秋田殿より拜領せし左文字の刀に粟田口久國の作ある一尺二寸の合口を横たへ人々の先に進んで五月廿一日未ほの暗き小長町へ到り高橋の表の貸屋に居る豆腐屋が今起て見世を明た許の所へ突と入ける有形を見て亭主驚り逃出さんとするを引止免我等ハ公儀へ訴ての敵討なれば驚事なく此裏なる高橋九郎兵衛方へ行く道の戸明て奥よと云ければ亭主少落着恐々ながら裏の戸明て教へたり民次郎恭なして小判一枚を遣し是の其方を認せし禮と云ば亭主ハ思慮なき事故夢の心地して恐しむがら押掛しを見えて

其儘四人の者は裏道へ抜け高橋の門前に到れ、民次郎隠手と堀を飛越拵橋を那方より掛
 掛て難なく三人を渡し又橋を引戻し夫より門小手を掛エイヤと一聲喚叫て押付けし耐も手
 丈夫に持たる歌舞妓門の貫木ばつぎと折て扉の左右へ開きたる強力の程をさまじき隙す
 主従四人入込て大音揚松井民次郎同要人兄の響を報はんためは是迄來たり高橋九郎兵衛尋
 常に出て勝負せよと呼はりければ彼方の近頃油断して備も忽ち酒色よの耽りて居た
 りれば家内大に轉動し上を下へと周章狼狽内にも柳井兵馬手早支度あし豫て待居し譚討
 更ふ驚事のない假令何十人有共我一人にて討取ん心願に支度して續き給へと和泉守國貞
 に好んで打せし鉄棒の如き三尺餘の大刀を無雙の強力にて宛然電光の如く縦横小打振て駆
 出れば是に勵されて矢東噓田谷澤も續て打て出たり民次郎之を見て憎き柳井の高音哉不便
 ながらも成佛得させんと立對ひ一太刀合をるよと見しが憐べし萬夫不當の柳井兵馬ハ二ツ
 に成て倒けり此勢に三人の者氣かくれしてひるむ所を新五右衛門時助の兩人得たりと踏込
 矢東谷澤噓田を切伏たせ其隙に高橋九郎兵衛躍る者共支度して切て出れば民次郎之を見て
 要人早くと聲懸れを仰にや及ぶべきと云ひながら九郎兵衛に渡合ふを見ると姿しく數多の

候客助太刀せんと要人をかつ取巻を民次郎と二人の家來立別で片ツ端より切立れば何も選
 出んとなしたるに橋を揚たて依て堀にさ、えづれ猫に逐れたる嵐の如く一所に集り屈居た
 り要人の市兵衛小劣ぬ劍術の達者成と隙間も在せず這立切付御手も負ず九郎兵衛が隙を見
 て打込む一刀に肩先深く切下れを九郎兵衛つと倒る、所を隙さず乘掛つて矢庭小首を討
 落たり助太刀の候客らに此体を見て戦々震ひ居たりければ民次郎打笑ひ汝等ハ頼たる者に
 て家來にて有まじ命の助る間少時夫にて待べしとて傍の土を掻集め一段高くをし懐中より
 兄市兵衛の位牌を取出し右の高見所へ据へ九郎兵衛の首を其前に備へ一同拜禮をなして位
 牌を取納め其より高橋の家内の者一同を呼出し汝等ハ高橋九郎兵衛の世話に成り居りし者
 なれを一向縁な兒者よあらず因て此趣を公儀へ訴へ跡懸小弔ひ得さすべいと言教て民次
 郎と拵橋を又掛渡之主従四人靜に表に出で兄弟二人の直に町奉行所へ罷越譚討の由を委
 細に届出ければ奉行は兩人を呼出し松井兄弟と其許達の事なるか先達江戸表の役人中よ
 り申來しに因て承知なしぬ神妙ある致方あり勝手次第に歸國致すべしと申し渡されしか
 ば松井兄弟ハ有難き旨御請して宿へ立歸るるふ七兵衛夫婦ハ我事の如く雀躍して悦びける

が夫より目出度繼を打果せし祝なりとて七兵衛が酒宴を開て發應えければ皆々喜悅の醉を
 不盡一ける扱翌日發足の用意なしければ七兵衛夫婦が今暫く御逗留なし給へと留免けれど
 も國許にて伊兩親が嘸待詫給ひぬらんとして若干の金子を七兵衛夫婦に與へて好意を謝し夫
 より大坂を立出て急ぎたる小程おく江戸へ着しかば先會津家を始め御懇命を蒙りし諸家へ
 參上して首尾能隨を討果せし次第を申し上げ直に本國へ立歸る御暇をも申送ければ諸家と
 もに御賞美あり又名錢を惜れ重ての出府を相待との御懇命を給りけるとなり斯て松井兄弟
 の積年心を盡たる兄の騷高橋九郎兵衛を討果承 應元年(慶安五年承應十改)六月本國ある
 羽州山形小立歸りければ兩親の言ふ及ばず諸親類の歡び一方ならず一家中學て兄弟の武勇
 を稱美なし別て民次郎と江戸表に於て諸家の御感賞を蒙り度々藝術の功を顯し厚き待遇を
 受くる由先達てより取沙汰なしければ家老中相談の上主君下總守殿へ此趣を申上げ民次
 郎を召出して惣家中の師範役に致そとの爵なき有し折柄あれバ一層評判高かりけり然る小
 民次郎と歸りし翌日より又々以前の如く一室に閉籠り父母兄弟の外親類の者とても決して
 附會せず初より深夜に至る迄書物のみに耽りしかば父母甚く心を痛め若や病氣ふても出や

せんかとは色々種々諒れ共兎角人に逢事は六ヶ敷とて更に門より外へ出ざりまに方兩親も
 證方なく其儘小過けるが二月ばかり過て後民次郎は父母の前に出先年申し上たる如く弟要
 人を以て家督相續仰せ付られ下さるべまを願ふを聞き父内藏點頭て如何も前々よりの約
 束なれを其事に於ては異儀あり其方の望に任すべし併ながら其方の生涯仕官致せざる様
 に申しとりしが只今迄ても其志しなりやと問ければ民次郎暫差俯向て居たりしが稍有て
 頭を上其又付てハ一ツの御願ひ有と別儀にて之を私し先年異人に誘はれて書物を讀み
 居りしよま申上しに全く偽りて誠は其節小生を奪ひ連行たる人の松井家と先祖を同一せる
 余吾將軍の未流平の直茂とて同じ日本の内ながら別世界の人なるが私を連行て父子の契約
 を仕つり文武の深意を傳授されたり即ち只今世上の稱美を受るも皆これ其人の之恩なり
 然ながら父母の恩山より高く海より深きを忘却仕るははるゞされ共如何せん弓矢の神に
 翻て盟し一言金石の如くして變じ難き依て再度彼地へ罷越彼家相續仕つる度問願はくは
 忍び難き情を捨て給ひ御暇下されなば有難く存し奉つると涙を流して申しければ母の憫
 れて胸をも得云す居たりなるが父内藏の借此よしを聞て汝を先年取られて後世小な死者

と思ひ居たりし計す歸り來り諸家の御感賞を蒙り名聞高しと聞き悦ぶ間も無父別んとす
るころ恨めまけれ何とて然程に思詰りやと言ければ民次郎涙を流し仰せ御尤至極にして一
通返し奉る詞は無恐入ぬ誰の人情を父母も離れ古郷を去り好む所に非ず只天地に誓ひ詞の
反古に成ん事を恥れとなりとて勿々思ひ止る氣色無れば父も左程に思ひ詰たるなれば今更
止むるも止まるまじけれ其方の望に任す可と許ければ民次郎大に悦び遂に山中に入り
て余吾將軍の家系を繼ぎ松井家は三男要人繼で子孫運綿たましと嘯

松井英傑傳終

明治廿六年一月廿四日印刷
五年二月十三日出版

版權所有

編輯兼
發行

日本橋區新和泉町一番地
筒井民老郎

印刷者

日本橋區新和泉町一番地
瀧川三代太郎

發

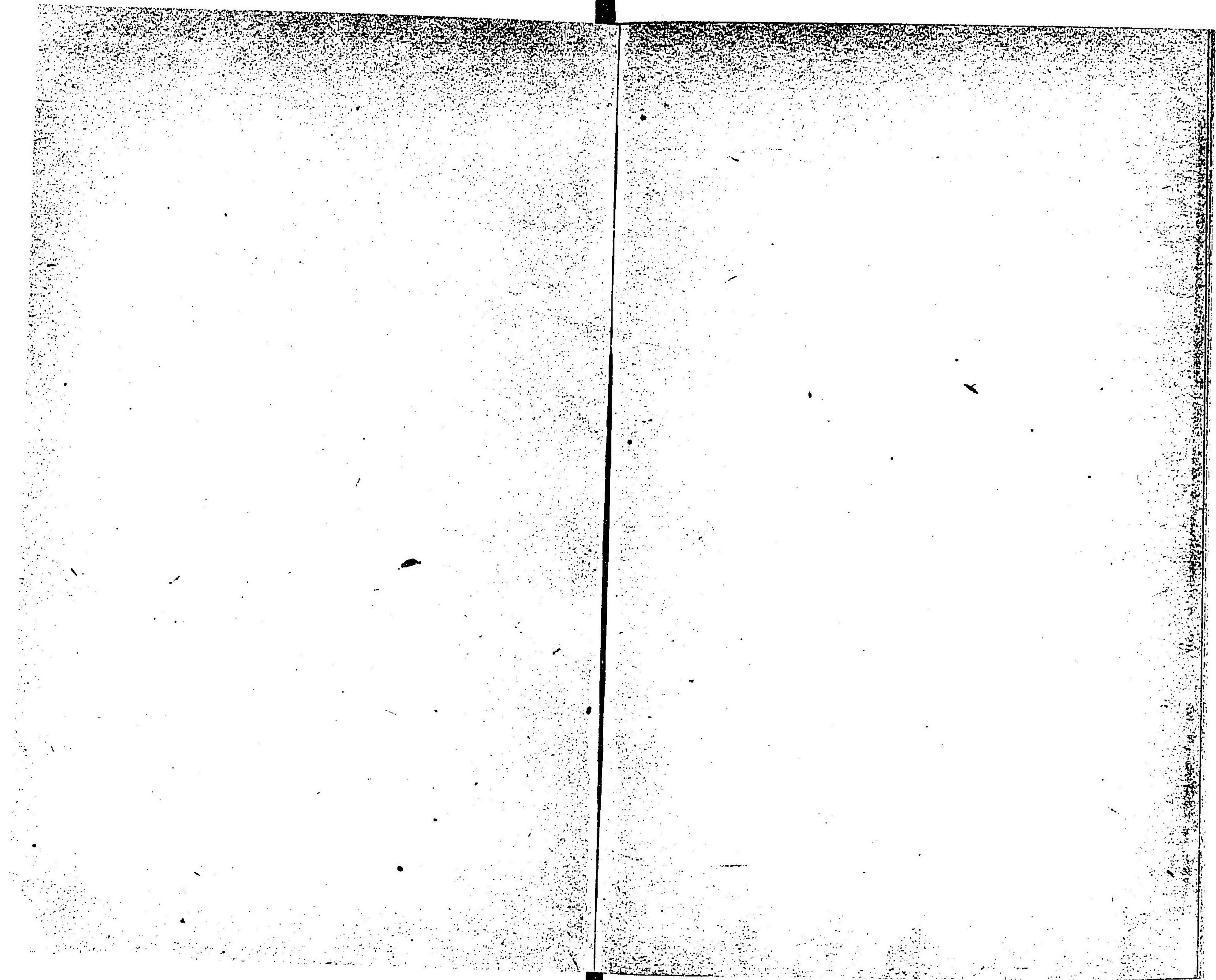
兌

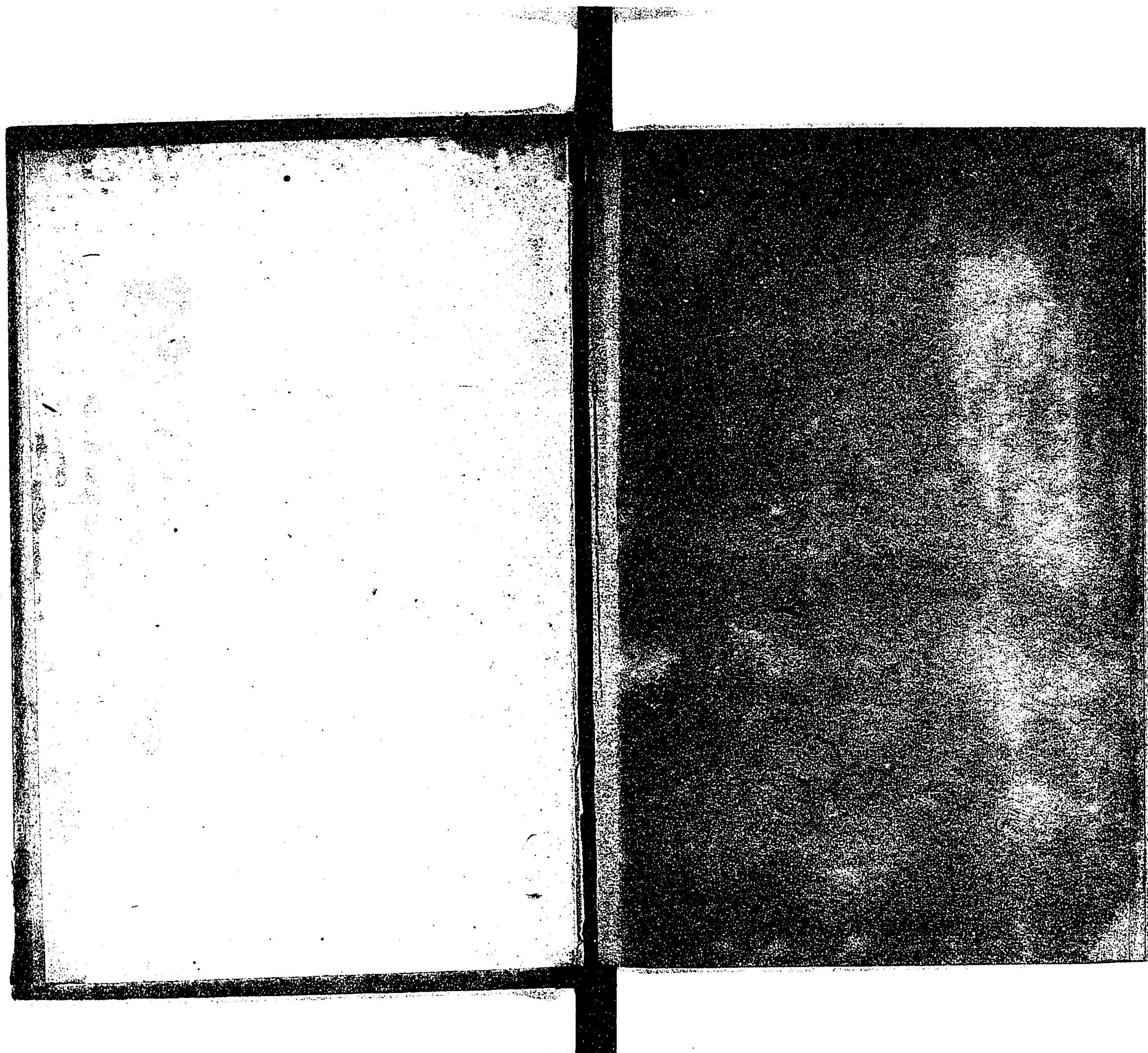
金

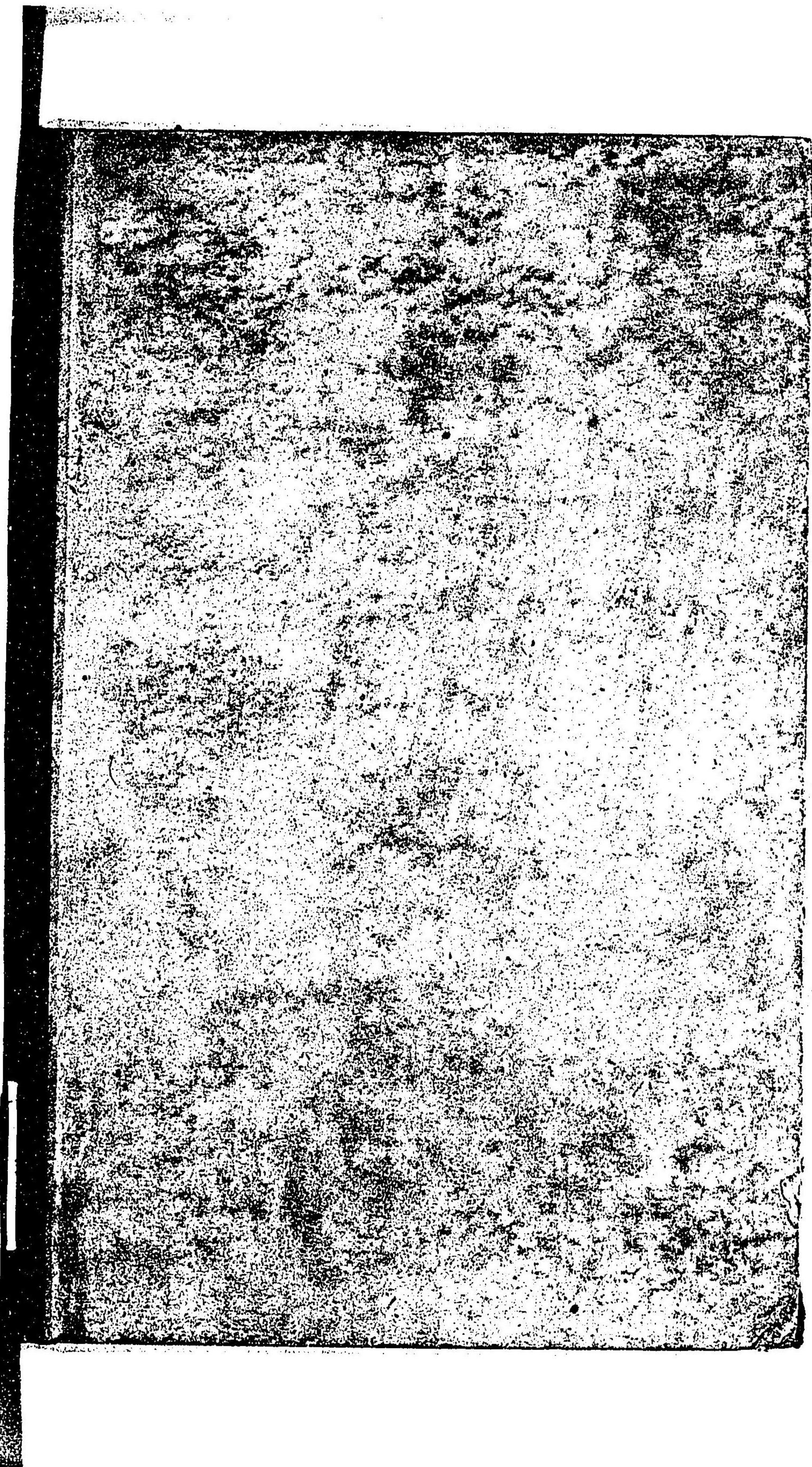
櫻

堂

日本橋區通四丁目四番地









091374-000-7

特12-225

松井英傑伝

金桜堂

M26

DBN-2276

